女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾壹號

當府內無郵稅

一冊六錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 161. MAY 11TH, 1889.

EDITORIALS:—O for One Poet in the Wilderness.

LEADING ARTICLES:—Temperance Question. by Mr. T. Andō.

CRITICAL NOTES:—"Oyae."

MISCELLANEOUS:—"The Two Birds." "Bakin's Novels." "Bakin's Letters." "Falling Flowers." A Talk on Literature."

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—"John Milton." "Miss Acherman's First Fruits in Hawaii."

NOVELS.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

第百六十一號目錄

社説　此の大沙漠界に、一人の詩人あれよ
論説　禁酒論(安藤太郎)
批評　倫理之基○西洋女大學○忍月居士の「お八重」○近妹國文教科書○マルチン、ルーテル傳
雜錄　二羽烏○馬琴の小説○馬琴の文章○落花○文話一則(鈴木弘恭)○古文斷錦○玉堂隨筆○茶話三
兒籃　太陽への病氣見舞
史傳　文傑ジョン、ミルトン○アッカルマン孃
小説　あるのん物語(美妙齋)○酒鬼(藤庵)
寄書　倫理の基の要旨(湯淺はつ子)
開書　敢て女學記者に呈す(長澤豐子)
時事　國家の富强は其の基に在り○監獄の改良○刑法民法に關するの請願○日本人○英國女權擴張案
片々　赤十字社婦人看護會○其他十件
外報　マウントホリヨーク女學校○其他四件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *H. I. M. the Empress honored with her visit the Great Conference of "The Red Cross Society," held on the 27 ult. She read an address known to be in her own hand writing, and the graciousness of her manners effected many tears.*

(2) *Silk-worm culture is to be carried on in Aoyama Palace this year as hitherto; and H. I. M. the Empress Dowager will engage in it herself.*

(3) *Count Kuroda on looking over a specimen of Miss Yō Hashimoto's penmanship, remarked that she is worthy of a secretary's desk in the cabinet. "Just so just so", answered Prof. Watanabe. The Prime Minister and the President of the Uiniversity agreed in the opinion that a lady is worthy of an office in the cabinet!*

(4) *Mr. Suematsu having finished the building of his new residence within the compound of the Shiba Park, consummated his engagement of marriage with the eldest daughter of Count Itō on the 22 ult.*

(5) *The Ferris Seminary at Yokohama has its accommodations doubled by the completion of the Von Schaick Hall. The means for the erection of which were collected by the Principal Rev. E. S. Booth when in America two years ago. These means have been materially supplemented by donations from the Japanese. The new hall contains twenty dormitories, four class rooms. Offices for the principal and manager reception room. A suit of rooms for foreign teachers and spacious Dinning room, Kitchen and Chapel.*

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

近日レピット夫人に代りて來着あるべき

アッカルマン孃の肖像

史傳欄内參看

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌　第百六十一號

明治二十二年五月十一日發兌

社説

○此の大沙漠界に、一人の詩人あれよ。

萬事西洋に限ると心醉して頭の頂だきより足の爪先に至るまで外國に眞似んとするもの丶多きゑ付け、之に激して大聲疾呼し大八洲の男兒神洲の愛國者豐葦原の瑞穗の國の國粹保存論者なりと慷慨するもの丶多きに付け、窃かに天下の重きを以て自任し遠慮なく當世第一流の豪傑ありと自ら許し而して同胞士民を物の屑とも思はざる人の多きに付け、只だ欝々として黄金の爲に奔走し畢生の事たゞ礦山夫と共に金銀を掘出さんとするもの丶多きに付け、選擧の爭ひ熊八の喧嘩よりも退化しステッキと拳骨と賄賂と反間と小權謀と細術數との連りに行なはる丶に付け、左らばとて坊主は無頓着にスマシこんで禪寺に胡座かき教師は洪水以前に復古して當世の時勢を構はず文學者は下らぬ議論をして無用の討論會を開き小說家はイヤに氣取りて重箱の隅迄批評し合ひ、意張る者と詰らぬ奴と怠けるものと死にたるものと役に立ぬ人物と放心したる隱居と冷たき論者と偏窟なる學者との極めて多きにつけ、吾人が一種の理想人を思ふこと頗ぶる切なり。而して今の歌よみの只だ古しへに眞似ること、洋學者を罵ること、天仁波の詮釋をすること、三十一文字を並べることの外に知らぬに付けて、吾人が懷く所ろの此の思ひは更らにいよ〳〵切なり。左らば何をか思ふ、云く眞成の詩人を懇望すると日に益す切にてあるなり。

抑そも眞成の詩人あるものは決して今の人々が通例に想像するが如きものにあらず、若し心に思ふ丈けをすら〳〵と詠み出て、枕詞を台にして「らん」「ける」と甘まく轉結し、シャレを巧みにして言ひ懸けを面白くもぢり、夫にて既に歌人あり詩人ありと言はれんには、ポーエットなるものは何處にても得て容易く製造せらるべし。若し小學生徒にテニハを敎へなば小學生徒も亦た大したる歌よみとなるべし、若し女學校生徒にテニハを敎へなば女學生も亦た大抵小町式部と成るべし。　然るに古來句あり云く「詩人は天成なり造る可らず」と、蓋したとひ之を育造し得べしとするも、敢て中々左樣に容易なるものにてはあらじと云ふ也。

蓋し詩人は、人類中の尤も純なるもの、自然なるもの、束縛せられざるものなり、故に其の眼こは未だ塵界に汚がされた

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

るとあらずして能く究極に看徹し、其耳は未だ破られたるとあらずして能く細低に聽き得、其心は未だ痛められたるとあらずして能く感情に極まるとを得。左れば萬人が朦々として確と見止めざるとき彼はすでに火を見る如くに確認し、萬人が思ひもつかぬときソヨとの風にすでに千里外の風信を聞き分け、天下の未だ泣くとを知らざるに彼は胸を打つて歎き、億兆が涙にむせぶとき既に天の榮光を贊美し、愛中の愛に感じ、悲中の悲に泣き、理上の理を覺とり、無形中の實形を認たむる、一に彼が異常の聰慧、俊爽、高大なる靈性を有するに由る也。

吾人は理窟を好むものあり、然し之は只だ其の理窟なるが故に好むにあらずして理窟によりて直覺的の明々理を認識し得べしと信ずるが故なり。足は歩くが爲に尊ときに非ず歩るいて某しの所ろに到着し得るが爲めに、議論は議論するが爲に尊ときにあらず論じて確論を知り得るが爲めに尊とし。左ればは文法と云ひ、論理學と云ひ、算盤玉と云ひ、解剖器械と云ひ、大凡そ或る事物を分析し、調合し、製造し、結搆し、はちき出すもの丶如きは、一に是れ其の或る目的に達し得べきが爲に有用なりと知るべし。然るに彼の文法家と云ひ、論理家と云ひ、理窟家と云ひ、八算見一家と云つて、其丈にて得々長者らしく高慢する者に至りては、吾人蛇蝎の如く嫌惡す。

詩人は如此き器械的の制御を脱して、直然天極の天に直覺するものなり、彼は望遠鏡にもよらで萬里の外を見拔き、顯微鏡にも依らで極微の細胞を撿視し、吾知らず歌ひつゝ將來の大理想を預言し、人類の魂しひを壓き上げて空中の一仙境に立ち登らしむ。而して彼の山川草木を見るや恰かも有情の人に於ける如し、故に其の同胞姉妹を見るに至つては殆んど同身の靈に於けるが如し、彼は茅屋の中にも天の使を見止め、糸をつむぐ賤女の間だにも女王を見止め、劍ぎを交ゆるの戰士の眞中に兄弟の情を見止め、短劒を貫ぬくの胸元に愛を見止め、而して己の爲にてはなく、敵の爲にてもなく、只だ其人の爲に、只だ其人の神の爲に、只だ其の人の神の大天地の爲に、或は泣くあり、或は喜こぶあり、或は感ずるあり、或は莞爾として笑ふとあるなり。

故に詩人は天地の粹なりと云はるゝともあり、亦た自然界のホト丶ギスなりと云わるゝともあり、人類中の天使、預言者ありと云わるゝともあり、人の尤も淸き情尤も高き心尤も優れたる魂しひを結晶せしものありと云わるゝともあり。夫は

何如に云ひても宜ろし、然し吾人は今ま之を人類中の眞との人、尤も傷なき、自然なる人と云わんと欲す。

此を以て若し高大なる詩人の人物を篤と吟味すれば、其の人物や實に完美、驚ろくべきの人性を存するなり、英雄豪傑の氣質も茲に十分に具わり、田作る人、羊牧ふ人の氣質も茲に十分に具わり、勳爵士の勇氣も佳人の優美も、哲學者らしき所ろも極めて小供らしき所ろも、皆なそれ〲に具われり。古人嘗て俊傑を以て氣違ひに近しと云へり、是れ尤もの適評にして、凡そ世にすぐれたる英雄學者と云ふものは少しく狂人に近きものなり、即はち其の腦玉のみが格外に大きくなりしか、又は其の頭腦のみが非常に大きくなりしか、何に致せ他の美なる多くの人性を損害せしめて、唯一つの氣質をのみ專ばらに成長せしめたる也。故に英雄は腦の片環、學者は腦の片環、佳人は情の片環、牧者農夫は肉躰の片環なるが如くなるに、茲に極めて痛るゝとなく少しも傷けるとなく、全然たる人間のまゝにて而して十分に能く成就したる者あり、是れ詩人。

詩人は眞の人にてあるなり、故に世に英雄を好むものもあれば亦た之を嫌ふものもあり、學者を好むものもあれば亦た之を嫌ふものもあるに拘らず、世に何人か彼の眞成の詩人なるものを愛せざらんや、其の質朴にして天眞爛熳たるの風采、其の親切にして温雅掬すべきの心情、其の行力にして謙遜純渾なるの勇氣を見て誰か之を愛せざらんや。子供も亦た之が朋友たるべし、老人も亦た之が朋友たるべし、男子も女子も學者も賤の男こも亦た之が朋友たるべし、但だ只だ彼の人間にあらざる僞善者惡黨のみ之に交わるとを得ざる也。

三

左れば、一治一亂の世の中に於て、紛々擾々たる汚らわしき世の中に於て、撲ち合ひ敲き合ふ亂暴なる世の中に於て、多忙を極め無味を極め、殆んど何事も厭き果てゝ嫌やになる曉つきに於て、先づ心を靜めて世に詩人あるものゝ存するとを考ふべし。此時吾人如何に失望したるに拘らず、もし一と度世に彼れ詩人あるとを思へば實に頼母しく感ず、然り世は決して絶望すべき所ろにあらず、天國は決して來らざるものにあらず、吾が心裡の友人は沙漠中にも亦た之れなきにあらずと悟られ、暗かに紅顔温腸して甚だしく爽快に思るゝなり。吾人は斯く詩人を思ふ毎に、人類なるものゝ實に立派の者たるとを知り、心窃かに安んじて思はず微笑するとある也。而して斯る詩人を思ふ毎に彼のロバート、バーンスを懐ひ出さゞるとなく、ロバート、バーンスを懐ふ毎に常にカライル

を思ひ出さゝるとなし。

カライル嘗てバーンスを評して云く、吾等はバーンスを愛し亦た之を憫れむ、愛と憫れみとは他を大きくするの傾きあれば吾等は詭し正當にバーンスを評價すること能はざるべし、人は云ふ批評は冷淡なる仕事なりと、思ふに必らずしも然るにはあらざれども、吾人は到底批評家の眼識を以てバーンスを冷評することを得ざるべし。其の詩は眞實にして自然なり、然れども彼が詩の能く吾々を動かし吾々を喜こばするものは、其の詩の如此なるに由るにあらず、實に彼が詩人たると云ふよりも寧ろ一個の人たりと云ふに由りて然るなり。彼は生前度々愁歎の詩を作りては何如んと勸められたることありしに、彼に暇まなきと生計の餘裕あらざりしとに由りて得果さゝりけるに、彼が一生は眞とに一篇の悲慘詩、而かも其の尤も悲慘なる愁歎の詩にてありける。吾々は世界が嘗てバーンスの死と云へる程に悲しき出來事を見たりしや否やを疑がふ、彼の第一世ナポレオンが憂欝なる大洋中の一小孤島に流され、英雄の末路身を漁どりする人にだに及ばざるものとして日夜島守に苦しめられつゝ死せしてふ事すら、倘ほ此バーンスの死と云へる事の如く切に憐憫恐懼の念を起さしむること能はじ。

嗚呼此の更に貴とむべき更に温和なる恐らくは更らに大ひなりける靈魂が、彌よ密に其一身を取圍み來る劣等の誘惑故障と望みなき戰爭を戰かい、勞苦々勉してますく\身を損し、一死やうやくにして此の苦境を脫出したることを思はゝ、世開けてよりバーンスの死と云へる程ヌ吾等の心を傷ましめたるものはあらじ。抑そも英雄豪傑なる一人種は其の死し行くと寧ろ世界に取りての厄拂ひなるべし、故に打勝手の卒去するは人世の能く堪忍し得る所ろなり、蓋は斯る人々の冷嚴なる智慧、同情なき高大の心、高き然し乍ら自ら利する所ろの熱心ある者は、概するに或る愛情を以て吾々を動かし得るものにあらず、若し最も多く吾々を動かし得しとあらば之れ吾々に只だ驚愕の念を動かさしめたるなり、故に其の死せしとを聞かば恰かもピラミッドの倒れしとを聞し如く、或る悲しみと驚ろきとを以て見學るに止むべし。然れども眞成の詩人、其人の心の中には智慧の流れが流れ、永久の調和の調子が聞こゆる所の眞成の詩人あるものは、實に是れ人世に與へられたる最尊貴の賜ものなり、人類に於て尤も尊としと見出す所ろの總ての美性は詩人に於て尤も自由に尤も清純に發達したるを認む、故に其一生は吾々に取りて最富の教科たり、其死は

吾々を尤も愛し尤も敎たる恩人の死せしが如くに歎るゝ也。嗚呼バーンスは詩人中の詩人、人類最純なるものゝ尤も純全あるものなり。其の温厚なる愛國心、其の親切なる勇氣、其の質朴ある大哲學、其の尤も調和したる美性は、實に人間の最高極全の躰を示す、万物の靈の靈、神子の神子、天下何處に行くとも之に優りたる人物あらんや。カライルは、多くの人に勝れて至て道德を重んじ深く英雄を崇拜したる學者なれば、其眼識を以て之を見れば蓋し眞成の詩人こそ尤も高き道德家、尤も大ひなる英雄にてありしならん。吾人が信ずる所ろ亦た如此し。嗚呼詩人は人類中に殘されたる唯一つの人類なり、エデンの花園を相續したる未だ墜落せざるの人類なり、百善を具備したる個人が未だ競爭とせめぎとによりて分裂せざりしの人なり、直覺するの靈性と愛極の感情と尤も病ひなきの思考力とが未だ傷つけられずして發現したる美くしき魂しひあり。左れば彼は何人にも親切なる友となり、亦何人の爲にも其の眞質なる部分を代表し、香を吐て天地を調和し人類を同一の根に反す、碎けたる世の調へ手、爭へる者の仲裁者、悲きものゝ慰さめ人、燥ける地の潤ほし主なり。之を以て人類が彌よ高ぶりて天を忘るゝ時、彌よ曲りて自然に逆ひ去るとき、權力名與黄金等の下劣なる爭そひの熾んとなる時、國相ひ侵し人相ひ擊ち國家惡みを以て充滿する時、特に人類が其の人類たるとを忘れ自ら極美の性あるを棄てゝ日に枯れつゝ行くとき、吾人は眞成なる詩人の出てゝ大ひに歌ひ吟ぜんとを祈るなり。吾人今の日本を見て實に眞成の詩人を懇望す、而して之を懇望すると共に實に女子の尤も饒とむべき人性に圓滿せるとを信ず。

論説

○禁酒論

安藤太郎

布哇國領事安藤君、此頃ろ「在布哇日本人禁酒會概況」一篇を津田仙翁の許に寄せ、廣く本邦民に告知せんとを托さる、依りて翁と計り、其の數節を左に拔摘して女學雜誌讀者の一覽に供ふ、編者白。

余は弘化三丙午の生にして本年四十四才なるが十七八才の頃より飲酒を始め遂に慣習性となりて當初は排悶遣興の一具に過ざりし者漸くにして日常必須の要品と變じ食に酒なければ味を甘んぜず寢に酒無ければ枕を安んぜざるの甚しきに至りたり偖爾來二十有余年間飲酒の余が身躰及精神に幾多の害毒

を加へたるや枚擧に不暇を以て屢之が禁止若くハ節制を試みしとありと雖とも己の本心を以て其一身を制御する不能ハ殆んと他人に對するの趣ありて禁止固より行はれず節制も亦永續せずして荏苒歲月を經過せり然るに去る明治十九年二月布哇駐劄の命を蒙り同國に赴任せんとするに當り數千の移住民を監督するハ頗る艱難なるべきの虞あると又同國の氣候ハ極て炎熱なりと聞きしが故に交際上不得止の外ハ獨酌全く禁止すべきの決心を以て横濱を出發せしが爾後種々の情況に由り幸にして獨酌禁止の内規ハ永續するを得て在勤二ヶ年に及びたりし然れとも本と此節制ハ一時の耐忍にして歸朝か若くハ事務簡易に赴くの期に至らば固より復舊すべきの預想ありしが故に克己復禮以て他人を矯正せんとする等の德行も勇氣も無かりしなり然るに同二十年九月中牧師美山貫一氏桑港より渡來宣敎の序傍ら禁酒會の世間に必要なるを余に懇說せり抑在布哇我移住民が渡航以來の狀況たるや各耕地到所男子は動すれば遊惰放逸に流れ女子ハ猥褻の行爲頗る甚くして遂には各自の損害より延て我が國名を汚さんとするの勢ありしを以て百方之が矯正を經畫するの折柄なれば若し禁酒會にして愈實行を遂るに至らば其他の陋風は銷し制止する難きに非ざる可の期望なきに非ざりし然とも同會を設立せんにハ余之が首唱たらざる可らず之が首唱たらんには固より生涯禁酒の決心無かる可らず若し此決心なくして單に在勤中或ハ若干年を限る如き禁酒する時ハ目今歐米諸國に設立ある禁酒會の本意に戻背する耳ならず發起者の精神人を感動するに不足を以て之が賛成同意を得る却て難きや明かなり然るに此決心の余に又容易ならざるハ飮客一般の常情已むを得ざる所たるが故に美山氏の談論に對してハ單に唯々する耳敢て之を心頭にも留めざりしが爾後同氏の教理に感ずるところありて迷夢始めて一覺遂に一生涯手を酒杯に觸るべからずの誓約を斷然締結するに及びたり時に布哇移住民局附屬醫官岩井祐三氏酒害を演說する極て剴切善く衆意に投ずる所ありしを以て遂に美山氏と謀り大日本禁酒會なる者を創立せしハ實に昨廿一年四月七日の事なりとす。

現今布哇群島中に就役する我が移住民ハ其總計六千有餘名にして男子一人每月所得の傭銀八十五弗を以て普通の定格とす而して其内より食料其他必須の雜費を除却すれば殘額平均五弗に下らざる割合なるが故に（領事館の貯金ハ之を算せず）一人一ヶ年間の純餘ハ六十弗餘即ち三ヶ年にして百八十弗及至

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

二百弗を貯蓄するは敢て難事に非らざるの實况たりとす左れば今此割合に據り六千人中より女子一千有餘名を除き（女子の所得不平均甚きを以て）單に男子所得の純餘總額を概算する時は一ヶ年にして三十万弗即ち三ヶ年にして九十万弗乃至一百万弗に埀たるの理なり然るに是は此れ移住民等が第一には三百六十五日間身躰壯健にして安息日の外は決して休業せず又第二には平生必要ある衣食の外は決して浪費せざるの覺悟に非ざれば此純餘の結果を致す能はざる者たりとす嘗余が布哇に赴任せしは距今殆んど三ヶ年の以前に在れども當時既に男子は博奕に耽り飮酒に溺れ女子も亦節操甚貞淸ならざるの狀况往々少なからざるを以て此等の弊害を矯正せんが爲に近者は之に説諭を下し遠者は之に布令を發すと雖も更に其奏効なくして勢益猖獗に赴くを以て遂に彼等就役の各耕地を悉く巡回し熟ら其生况を點檢せしに其狀多くは寂寞たる山間原野に十百群居する恰も該兵營境界に彷徘する所ありて勞働の余は四顧渺漠更に事物の耳目を慰る者なきを以て畢竟するに其酖毒たる博奕飮酒も蓋し當初は單に遣興の一具に過ざりしや知るべきなり然れども該兵營境界に對しては歐米諸國中既に風俗壞亂の虞あるを懼れ彼是之が豫防の經畫に從事する者ありと云ふ今夫れ紀律を以て撿束せる兵隊すら猶且風俗壞亂の患を免かれずとする時は若し勞働耳に使役する農夫をして群居其所爲に放任したらんには他日彼等歸國の後我が社會に對し如何なる弊害を惹起すべきや靜思此に至れば實に杞憂に堪へざる者あり然るに此等矯風の事業は到底尋常一樣の説諭手段にて實行を得べきの謂はれなきが故に百方苦心の折柄美山牧師の桑港より渡來各島を巡遊敬神愛國の眞理を演説の傍ら風俗矯正に着手せしに頗る人心に感動を與へたるに由て此一方以て我政府の保護統治の精神を貫徹するに足るべしと篤信し遂に内外の有志者と相謀り福音會（今日の美以美敎會の濫觴）を開設して專ら民間に布敎を奬勵し又幾くもなくして禁酒會を創立するに及びたるなり然るに今日禁酒の成蹟より之を考ふるに爾來男子の博奕に耽るも遊惰放逸に流るゝも罹疾休業の多きも女子節操の貞淸ならざるも又隨て彼等の内身邊に一錢の貯蓄なきに至りし者あるも其由來は殆んど一として飮酒に起原せざる者なきを知るなり即ち其所以たる目下禁酒の盛に行はるゝ地方に在ては博奕全く其蹤を收め罹病休業の徒甚稀にして男子は誠實に勉勵し女子も亦品行端正なるが故に隨て彼等の内暴富赤貧の不平均なくして人々各至當

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

の貯蓄と併て雁主の愛顧を得るに至るを常とせり今此等に對する證跡中の尤著しき者を掲んには元來領事館には二割五分と稱する定規貯金の外に通常貯金の名を以て移住民の爲に其純餘金を貯存するの定制あり此趣意たる彼等の内家郷に送金の要なき者は月々所得の殘額即ち米金貨を虎子も啻ならず秘藏するの際或は盜難に罹り又は飲酒博奕に浪散し遂に袋中空竭奈何んともす可らざるに至る者あり而して此等言語の不通と事情に晰かならざるより他に貯存の道を求むる能はざるを以て我政府には憫然の餘り特殊の方法を設けて此等の殘餘を領事館に貯存せしむるの便宜を與へられたるなり是に於てか盜難は全く消滅し又浪費も幾許か減却せし趣ありし扨近頃此毎月領收の貯金額に就き之を四五ヶ月以前に比較して其増減如何を調査せしに今日移住民よりの寄送額は殆んど前日の二倍に達し而して其送金者中金額の増加せる者は悉く禁酒會員に非ざるはなしとす實況如此あるを以て今日在布哇我移住民に對し之が風俗を矯正し之が生計を豐裕ならしめんとするには禁酒の効用盖し福音と併立する者ありと稱するも敢て誣言には非ざるべき乎今夫れ僅に二千名の少人數が僅に十ヶ月間の禁酒に於てすら猶且此著明なる成績あるが故に若し群島一般の日本人六千有餘名にして少くも二三ヶ年間此毒液を一滴たりとも咽を下さゞるに至らば前文の豫算たる三ヶ年間に六十万弗以上の純殘金（二割五分貯金外）を貯蓄するは決して難事に非ざるなり況んや一生涯の禁酒たるに於てをや又啻に此等貨殖の關係耳ならず人々身體は壯健に精神は爽快にして智力は發達し工藝は進步し風俗は純良に歸して生計は安康に赴き遂には群島中無比の良民たる稱呼は日本人の專有たる可きや疑なかる可し。

禁酒の日本人二千名に成績ある如此なる時は其他の日本人四千名にも一樣の成績なかる可らざるの道理より玆に始て一種の奇想を發し又之を我本國同胞三千八百有餘万人に推及し以て其禁酒の果して我邦に必要あるや又其成蹟如何なるべきやを考究せんと欲するに至れり因て試に明治二十一年帝國第七統計年鑑に據り先づ釀酒の概況を案ずるに十九年度の調査に於ては日本全國の釀酒場合計一万五千二十五ヶ所にして三府四十四縣中一地として釀酒せざる者なく又釀酒の爲に費す所の元米一ヶ年間合計二百六十二万六千有餘石にして此量額の大なるは以て東京大坂京都三都會の居民を一ヶ年間振給して猶有餘者たりとす而して之より釀造する處の清酒の全量は二

百八十六萬九千有餘石にして之に濁酒燒酎等凡て醺氣を帶ぶる飲料を合計すれば三百五十四萬有餘石即ち其平均價格は一石に付一圓九十餘錢たるを以て其全額概計四千九百五十六萬圓を得るにより又之に輸入の洋酒元價八十三萬有餘圓を加ふれば日本全國に於て飲酒の爲に一ヶ年間費す所の全額は合計五千〇三十九萬有餘圓にして我政府の十九年度歳入額の七割に垂んとするの割合とす是れ豈不權衡の統計數と謂はざる可けんや而して其酒類は殆んど一も海外輸出に屬する者なきを以て此五千〇三十九萬圓の巨額を全國一般に分當すれば即ち一人に付一圓三十錢餘を負擔するの割合たりとす然るに釀酒の爲に費す所の米穀如此廣大なるも又飲酒の爲に所散の金額此如夥多なるも若し此消費損失して此額面の範圍內に止め他に損害の影響する所なきに於ては或は枉げて人間娛樂の已むを得ざる一事と寬恕する所なきに非ずと雖も其決して然らざる所以の者は現に在布哇日本人の狀況に於て昭々明白なりと謂ふべきなり即ち我勞働者の博奕に耽るも其游惰放逸に流るゝも罹疾休業の多きも女子節操の貞淸ならざるも一錢の貯蓄なき究乏に陷るも其由來は殆んど一として飲酒に非ざるはなき確證より推考する時は十九年度中全國の犯罪者二十九萬七千有餘名の內男子にして二十歲以上九十歲に至るの間死亡十一萬一千有餘名の內其過半は飲酒之が直接間接の原由たりしに非ざるを得んや又同年度中單に官金救助に係れる難民にして既に一萬人に超過するが故に此他鄕黨朋友の救濟に由て生息せし所の者其幾萬人なるを知るべからず此等の過半は其原由飲酒に非さりしを得んや全國貸座敷の總計七千七百八十戶其所藷の娼妓總員二万七千〇七十五人此內多くは游惰放逸なる父母兄弟の爲め若くは自己不品行の爲め泥水に墮落せし者なるが故に又其過半は飲酒之が原由たりしに非ざるを得んや若し夫れ果して然らば吾輩禁酒會員が爾來經驗する所の如く以上の犯罪死亡貧困猥褻の過半は禁酒の功力に由て除却することを得べけんや必せり又此他移住民等の貯金增加の割合に準じ我國禁酒家の囊裏に幾多の餘裕を生ずべきや知る可からざるなり然るに此は是れ僅に二十名の勞働者が田間の生計より推及臆算せし者にして固より比例其當を得ざるや言を俟たざるが故に今試みに數十步を進め深く我國內況に踏入り酒害の程度如何を精細稽査したらんには何等の現象を發見することあるべきや該三百有餘萬石の酒液の浸及する所に至りては貴賤老幼賢愚貧富の別なく齊く樽前に狂醉し富者は身を傷り貧

者は産を傾け禍害を來し風俗を亂し而して猶悔悟せざるの狀躰は滿身の煙毒又甚ならずと謂ふべきならん夫れ仲尼は修身齊家を以て治國平天下の楷梯とせられたり宜なるかな我國同胞にして人々布哇禁酒會員の一小例を指斥せず斷然酒杯を抛つに至らば其身躰は壯健精神は爽快にして自ら事業に誠實勉強あるを得るが故に得るところ又隨て豐裕なるは疑を容れざる可し然らば則ち此壯健と勉強と豐裕を六十余州に擴張するに至らば天下富國強兵ならざるを欲すと雖も得べけんや愛國の士は宜く將に猛省する所あるべきなり。

社會は思考者の形勢の如し最良の腦者最良の地位を占む　エモルソン

食は飽て而して後ち美を求め衣は暖にして然して後ち麗を求む　墨子

批評

(91)。倫理之基　小本一册卅四頁定價二錢　發賣所東京民友社警醒社及本社

此書は婦人矯風會員湯淺はつ女史が編輯せらるゝもの、第一集にして、專ら妾を全廢し且つ姦淫の罪惡に付きて男女に同一の刑を科すべきことを痛論したるものなり。對嶽逸人と號しぬる人見一太郎氏が筆にして、文章雄健論理強密、殆んど「將來之日本」に再會したるの文味多し。該書論述の要點は本號寄書欄内に湯淺女史が自ら草して寄送せられたるを掲げしに由りて知べし、吾人は全然之を贊成し、切に如此き書籍の出版せらるゝことを感謝す。

(92)。西洋女大學　中本一册百七十二頁定價　發賣所東京神田宮本町發兌閣

此書はヲトクリフ夫人の「少女伴侶」と題する書を、片岡信女史が反譯せられたるものにて、明治二十年に初版を發行したり。此頃ろ再版したるものに付更めて之を評せず。

○忍月居士の「お八重」（其一）　藤の屋主人

未だレッシングの名作を味はず當國民之友にてレッシング論を讀みおぼろげながらその文章性質等を知れり。未だシルレルの戯曲を讀まず當忍月居士の譯詩にていくらかその結構を悟れり。尾崎紅葉氏より十九世紀の新歌仙と云へる榮稱を受けられたる忍月居士——「浮雲」と「妹と背鏡」を批評して文壇を睥睨されたる達眼家、批評は——申すもおろか——著述の才にも富み給ふ日本のレッシングが新著「お八重」こそ顯はれたれ。三日見ざれば眼を瞎して待つべし、「捨小舟」に失望してなどか「お八重」を顧みざらんや。余が「お八重」にこがるゝ事既に久し「お八重」に望む事も又多かりし。廣告の新奇表紙の優美挿畫の佳麗何れか四方の眼を引ざらん、

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

夫よりも余は果して世のシンテゼーに協ひし完全なるトラゲヂエ——獨逸文學の眞相を見るを得んと前びろめの廣告に首延して待ちたるに。若し一度顧眄せば必ずや三十六宮無粉光の感あらん……と思きや——殘念ながら——背面美人に失望せしと申すより外なし。忍月居士の御譯釋にてシルレル、レッシングを覺し嗚乎の代物なれば是が即ちレッシングなりと申さるれば致し方なし、平易單純なる文字中に諷誡ありと云はるれば詮方なし、社會經營的の眼孔を以て細かに人情の微を穿ちしとならば「左樣で御坐イ升」と云ふより外なし。我身ながら淺識不學にして是等の隱微妙趣を發見するを得ざる不活眼を悲しむのみ。若し忍月居士にして余の不活眼を咎め給はずんば、曾て「好著多くは貶毀を受く」とのたまひし忍月居士なればヨモ咎め給はじければ必ず〳〵余が遠慮なき妄評に腹な立て給ひそ。之より余は不活眼家なれば忍月居士より「縱令萬人の譏を受くるも君御一人の御心に叶ひなば其身の冥加惡かるまじ」なる重忠の詞を頂戴するを得ざれどもまさかに岩永めかして嫉妬偏執の情を挿むにもあらず。唯晴雲に賛たてる新聞屋の雷同主義を嫌ひ、好んで憎まれッ子になるも又止を得ざるのみ。

余は既に「捨小舟」に於て失望せり、「お八重」を讀んで更に失望せり。遠慮會釋なく申せば「お八重」は江湖の讀者を失望せしめし「捨小舟」よりも劣れり。文章に於て幾分か煉れたる處あるにもせよ、全篇の趣向より曰ば數段を下れりと云はざるべからず、よし趣向は小說の末技なりとするも、小說と名くる以上は多少の立案を要すべく、其巧拙精疎に依て多少の評をなすも無益にあらざるべし。「捨小舟」は淺薄に考ふれば「妹と背鏡」より奪胎したるものにして、斬新とば云ひがたけれど、結局の趣向如何にも口ざましく讀者をして思はず長嘆せしむるの妙味あれども「お八重」には何等の感なし。全篇百七十餘頁其趣向は無味淡泊にして墨摺の繪番附を見るが如し。元より無味淡泊の中に一種の妙あるは進步したる小說の常にして、僕の淺識と雖もデユマ派或は馬琴流の脚色を尊ばず却て無味淡泊を愛すれども「お八重」は瀟洒なる湯上りの佳人にあらずして地口繪の八重垣姫の如し。僕此頃二葉亭氏の譯されたるツルゲーネフに感服す、併せてツルゲーネフを奉ずと聞きし嵯峨のや氏の小說に感服す、思ふに忍月居士も感服されし一人ならん。ツルゲーネフの小說は單純の脚色なれども若し其單純を玩味すれば一種不可言の妙あり、字句

の中に脚色を藏め景叙の外に理想を含むの巧妙に到ては他の摸倣すべからざる處なり。若し表面より云へば「お八重」の脚色はツルゲーチフより複雜せり、然れども複雜して却て無味と成れり。例へば桐の糸柾に漆塗りたるが如く是眞橋市の妙工ならば兎にかく、尋常一般ならば其が爲に氣韻を失ひたるが如し。「お八重」の趣向はツルゲーチフにあらざるも比較的に評すればツルゲーチフより複雜して却て無味なりと云ふも不可なからん。殊に結末の曖昧模糊としたるはツルゲーチフの神韻元より無し、「捨小舟」の妙味も需むべからず。夫のみか啻に曖昧模糊に、筆を止むる能はず「書生氣質」に於ける春の舍氏が失錯を襲踏して「著者申す」云々を書添ゆるに到ては拙も又甚しと曰はざるべからず。僕先年の美術展覽會に陳列ありし德川家の藏幅牧溪の筆に驚嘆す、淡墨を以て巧に瀟湘の圖を寫し遠山遠波の景色神韻縹緲として忘るゝ能はず。思へらく小說の結構も又斯の如くあるべし、縱令ひ濃粉を以て細微を描くとも若し氣韻なくんば死畵のみ死筆のみ。所謂氣韻とは何れに存する者ぞ、一點精神の注ぐ處にして繪の全躰を云ふにあらず。よし理學上より非難なきも精神注がざれば博物書或は讀本の插畵にして到底美術家の觀賞を買ふに足らず、若し一點注ぐ處あれば全圖悉く活動するの趣あり、顧長康が傳神寫照正在㆓阿堵中㆒と云ひしは即ち美術の眞相を觀破せし言葉にして小說を編む者此覺悟なかる可からず。「捨小舟」の結局は幾分か其失望を回復して「浮世は憂世」なる一回は全篇を震盪せり。故に余は世人が失望せるほどに失望せず、啻「お八重」に於て望む所も多かりしが爲に失望する事も又頗る多し。若し繪入新聞の續き物なりと云へば甘んじて傑作なりと云ふべけれども、獨逸文學を以て文壇を睥睨せし堂々たる石橋忍月居士の著として是を雲煙過眼するを得ざれば、余の疑ふ處を一々列擧して居士に正さん。獨り余のみならず獨逸文學に暗き人々は必ず仝感あるべし、レッシングに斯る結構あるや――シルレルに斯る妙味あるや。

○近体國文教科書　（關根正直著）

去年の春第一第二の兩卷出版せられたるに續き、此度其第三第四の兩卷發兌せらる。藤井高尙、石原正明、松平容敬、伊達千廣、林羅山、源隆國、橘成季、西行法師、荒木田久老、同麗女、藤原吉房、鴨長明、藤原忠親、等も十三家、其の外種々の物語實記等より作者知れざるの名文を集め、第一輯に比較すれば人の知らざるもの多く出で、國文の光輝ます〳〵現

わるゝに近しと云ふべし。惜しむらくは前輯よりも正誤批判の用意少なきが如し。更らに第三輯の出でゝ深山の櫻木の明らかに朝日に香はんとを望む。

○マルテン、ルーテル傳（加藤　鐵　譯）

邦文に綴りたる此の大豪傑の精密なる傳記あらざりしは極めて遺憾なりしに今まや既に之を得たり。撰輯宜しきを得文章亦た淡易。眞英雄の肺肝を示すの良著と云ふべし。

～～～～～～～～～～

夫婦連演説會より歸り途ち、夫が妻に向ひ
お前今日は餘程考て居た樣だつたネー、私も感じたよ、なんでもあれこそ本物だつたネ。
妻「なんですト、なにそんな事が御座いましやう、北村の奥さんが、いくら氣取て居たつて矢張りにせ玉ですワ。

[illegible]

雜録

○二羽鳥　しのぶ

余れ此頃ろ少さかの暇を得て或る田舍に遊びたり、滊車白雲を吐きて万綠々の間だを一走し、都を出でゝ僅は一時に足らねど既に七八里の先に到着しぬ。一面の平野に秀いでたる松亭々として列び立ち、鄙びたる茅屋一二軒僅かに羇客の宿りに備えたり。浴みして樓に登つて望めば、万松未だ動かずして微風徐ろに來り、新たに動きたる田農夫の肥を沒して特に人を小さくす。煩わしき客もあらざれば余亦た迫りて爲すべき務もなく、携さへ持ちし詩集を吟じて獨り嘯ふきたり。時に快然たる鷄聲を聞て椽側近う居寄り見れば、朱冠高く、羽毛美に、昂々足を揚げて濶歩する雄鷄の後へには、温乎たる牝鷄其の服を質素にし、其歩みを緩やかにし、其の聲を親切にして雛数羽を伴なひ行くなり。木陰に到り、鼓翼一撲、喈然として鳴く、其聲余が感線を衝き、彼の幼けなき時古郷の庭に於て手づから米を飼ひたるの樣、彼の朝たに鷄鳴を聞き書を腋挾みて講道館に出でたるの樣、彼の隣家の愛鷄と鬪わせ遂に爭つて余が木刀を揮ひしの樣、又嘗て路に迷ひ山徑をたどり行くとき端なく鷄聲を聞きて舊寺院に到り高僧と清談したるの樣、又嘗て洋學校に於て讀みたる英讀本中の鷄雛の話し、又嘗てミルトンの詩にて樂しみたる觀樂鄉の鷄聲の句、又嘗てゴードスミスの詩にて記憶したる田家鷄犬の爽快なぞ、油々として余が目前に想ひ起されたり。噫、鷄よ汝ちは何如に靜かさの使ひなる哉。時刻を計るには汝ちを機械に讓るべし、肉を食すは汝ち之を牛羊に讓るべし、汝ちが今長とする所は更に之に優りたるものあるなり。噫、鷄よ汝ちは威武を示し、温愛を現わし、和樂を知しむ。然る

に何者の狡兒ぞ汝に多牝を嫁し多く卵子を收めんとす、然れども汝ちは允と之を好むものにあらざりし、汝ちは實に一牡一牝、眞正の二羽鳥にてありしものを。

○馬琴の小說　ふ　ぢ

馬琴は日本小說の大家なり、馬琴の文章は麗玄にして脚色も陳腐にあらねど日本に馬琴より外に小說家なしと思ふこそをかしけれ。百餘卷の大篇を著はせし者は馬琴のみならん、二百餘種の物語を作りし者も馬琴のみならん。されども美術は長短大小に依て優劣はあるまじ、百餘卷に涉りしとて八犬傳のみが傑作あらじ二百餘種の多きを著はせしとて猫の妻にては大家と云はれまじきに此二點のみを稱揚して神佛の如く崇むることぞ奇怪なれ。馬琴は小說大家の一人には相違なけれど唯一の者にてはあらじ。一派の新文躰を作りて全國を風靡せし其力の恐ろしさ、是れ又文壇の英傑なれども斯くまで馬琴に心醉するとは具眼者の少きも怪しむべし。國民之友書目十種を見るに馬琴の著書は九種までも拔擢の榮を得たれど西鶴京傳を嗜好するもの少きころ嘆はし。七五の調を作りて俗物の愛を買ひしはさる事ながら、人情を穿ちし巧妙に到ては其磧京傳をもて日本小說の神髓となすに、未だ味はずして野卑猥褻なりと退くるは先人の苦心を知ずと謂つべし。ピックウヰクを讀し人多し傾城禁短氣を知る者なし、リットン、サッカレーを口にする批評家ありて西鶴團水に眼を丸くする小說家多し。進みたるか退きたるか我は知らねど、西洋文學に明るきも恐ろしく日本文學に暗きも恐ろしゝ。

○馬琴の文章　輕　快　子

牡丹芍藥は濃艶を以て賞でられ水仙菖蒲は淸楚をもて宜しとす梅の仙骨蓮の廉潔花各々愛すべきの色ありと雖も若し千紫万紅一時に開かば風韻それ何れにか需ん、文章又斯の如し、艶麗の文字優美の語句を重ぬればとて是を至文と賞するを得べき、白氏文集の浮薄と罵らるゝも是故のみ、明人の輕佻と評さるゝも是爲のみ。馬琴の文は全國に廣がり今に到り猶ほ其餘唾をねぶるもの少からず、然れども艶麗の句のみ優美の語のみ氣骨に乏しく情致を穿たず。彼の濱路雛衣のくどきの如きも文章に眩惑されて賞揚すれども長恨歌琵琶行一般にして他の平易單簡の文を作りし人に及ばず。風來の文を見よ、文字は平易なれども氣骨あるに到つては馬琴の及ばざる處あり。又並木近松が淨瑠璃を讀め、俗言をもて巧に人情の微を描きしは馬琴が及ざる處なり。試に何傳實々記と河原達引を比較

女は何れか文章に妙なるを知らん。若し白氏文集を以て唯一とせば輕浮を脱せずして、俗に陷るを如何せん。馬琴は白氏を奉ぜしにあらねど、若し馬琴を推尊して其文に摸倣せば氣骨を失ひ人情に遠ざかり唯字句の末に拘泥し文章の本旨を誤る事白氏が日本上代の文學を腐敗せしと同樣ならん。彼も一代の能文家なれど強て是に擬るは猫に類するの毀もあるべし。艶なる文字並べしとて氣骨も情致もなきは醜き女の友禪を着たるが如けん。双ヶ岡の法師も曰へり「賤げなる者前栽に石草木のおほき」と。

○落花　ゆきひら

見よ少年及少女。昨日までは爛熳と咲き亂れたる櫻の花も。今日は風そよぐ度にアレアノ通り。ヒラ〳〵と飛びて散ゆくなり。卿達は之を見て花は麗しきものなれども。散てはいかにはかなきものぞとおもうならん。されど今一つ思ふべきは余も卿達も亦この花に等しき事にぞある。花には花を散らす嵐の吹くが如く。人には人を亡す死といふ風の誘ふなり。この風一たび吹來らば。博士の筆も將軍の鞭も。握りしまゝに落るなり。いかに卿達が確と母上の袖を捉らゆとも。母上は振離して逝き玉ふなり。頬に吻け玉ふ父上の愛の唇も鐵の如くに凍るなり。この風は。高き雲井の臺の上より賤が濱邊の伏屋の下まで洩れなき樣に吹めぐり。老たると若きと男と女の區別なく。一分時間に六十七人。一日に九萬六千四百八十人を薙捨てつゝ。猛り進む事のいかに疾さよ。聞け。このセコンドのカチ〳〵といふ響は。彼が馳せ來る音なるぞ。戯るゝ間も眠る間も。彼は一歩も其歩を停めず。されば。余は固より卿達も又卿達の朋友も或は明日或は一月。或は一年或は十年晩くとも四十余年を經たる後。再び彼等を音なひ見よ。慥かに彼等は學校に在らず又家にもあらず。茂れる森の木の間洩る月かげにすかし見ば。立方躰の石に刻みたる文字の。嘗て草紙の上表紙に見馴れし文字と等しきを見て。彼等は恐く地下幾丈の深き處。枕を並べて眠りつゝある事を知得たらんには。余が今。卿達も亦此花に等しといひし言の。感情にあらず。形容にあらず。小説にあらず。又脅嚇にもあらず。過去幾億萬人が証據立たる事實にして現に卿達が負ひつゝおる運命なる事を知り得べし。之を人間の眞相とはいふなり。人は眞相の上にたゞに總てを築かば。悔は少なく望は清く。その礎は死も之を覆す不能。よし肉躰は花の如く散りて朽果るにもせよ。靈は薫りて實を結び。ハレルヤを唱ふて天に上ら

ん。いで我等も神を讃むべし。

とくいそしめよ。　夜はきたるぞ。
わしたのうちに。　いそしめよ。
つゆの壵らたま。　かゞやくまに。
はなのなかにも。　いそしめよ。

○文話一則

鈴木弘恭述

近世の人假名文を書かむとするに。その文中にの□の字は幾個重りても指間なきものなれども。ての□字にの□字の重ありたるは。甚わろしと心得て。しひて省き去る人多し。是は却て心得ちがひなり。強て重ねよとにはあらねど。おのづから重なるべき所に至りて。是を省き去るには及ばざる事なり。假令ば、

隅田川の花みむとて□二三人して□行きてみて□酒などのみて□うち興じて□云云

とあるべき所を省き去りて。左の如くかけば。却て煩はしからずしてよきやうなれども決して然らず。能く味はひて見べし。

隅田川の花みむと二三人して□行きみさけなどのみうち興じ云云

と書きては。却て文法に叶はざる事あり。今古人の文を左にしめすを見合せて知るべし。

竹取物語の文中に（ての□字五つ重ねたり）
心もとながりていと□しのびてた□ゞ舍人二人めしつぎとして□やつれたまひて□難波におはしまして□問ひたまふとは云云
榮花物語の文中に（ての□字七つ重ねたり）
絵所のかたには洲濱をゑにかきて□くさ〴〵の花生ひたるにまさりて□かきたりやり水いはほ皆かきて□しろかねをませのかたにして□よろつの虫どもをすませて□大井にせうえうしたるかたをかきて□鵜舟に篝火ともしたるかたをかきて□云云

是等の例なり。此の他源氏物語にもあれど。源氏のことはおのれが講義錄に委しく文法を論じたれば。此所には省くべし。

さて又□にの字を重ねたる例は左の如し。

萬葉集卷の八長歌中に（にの□字七つ重ねたり）
あさにけに□出みることに□いきのをにわが思ふいもに□ます鏡清き月よにたゞひとめ見せむまでにちりこすな□云云

又本居宣長の文中に。ての□字九つ。にの□字五つを重ねたるもあり。左にその文をしめさむ。題は稻掛大平が家の業のみかべの詞とあり。

稻かけの大平のこが遠つおやの世より家のなりとつくりてうるものはもまめをひたして□ほどはして□うすにすりて□しぼ

りて□にて□おして□かためて□なせるものあたひやすくて□いやしからずあぢはひありてみやびたれば月に□日にけに□いやめづらに□くさ〴〵にとゝのへてたかきみじかき人みなの朝な夕なとめでくふものなり」

是等を見て知るべし。さてこれらを味ひ見て心得たらんには。おのれがいふことの謬言ならざるをおのづからさとるべし。世の初學の徒すこしく注意あらまほしくこそ。

古文斷錦

俳文は一種の氣骨ありて面白く獨り詞句の和歌に異なるのみならず情に於ても更に一段の妙味あり蓋し日本小説文躰の出る處は俳諧にありて西鶴其碩の文に一種の妙味あるは卑近の事物人情は極めて流麗に描寫せしにあり、次に抄出するは風俗文選の中にありて讀者家は通例讀んじ餘りに珍らかならねど未だ知らざる方様に示す、我國俗文の妙味は馬琴種彥にあらずして西鶴其碩にあり而して其若く處は風俗文選にして許六支考等の文は一唱三歎の妙ありと謂つべし。

支考は蕉門の一人にして濃洲の人なり獅子菴或は東花西花と號す、芭蕉歿後四方に遊び風流の道を説く、故に支考の風を慕ふもの多し、支考の文は字句に失する事許六の典故に若しむに同じく字々極て麗妙なりと雖ども奇拔に乏しく脱俗の質なし、次に抄出するは四六の法に傚ひ萬葉の文字を以て押韵せしものにして字句の配置に苦しみ自然の神韵に乏しきが如けれども悲痛感情的の文字は前後無比摸倣すべからず。

祭猫文　　支考

李四が草庵にひとつの猫兒ありて是をいつくしみ思ふ事人の子を育つるに異ならずことし長月二十日ばかり隣家の井にまどひ入て身まかりぬその墓を庵のほとりに作りて釋自圓とぞ改名しける彼をまつる事人をまつるに殊ならねば此たび爪牙の罪をまぬかれて變成男子の人果にいたらんとなり其文に曰く

秋の蟬の露に忘れては、鳥部山を四時に躁ぎ、
秋の花の霜にほこるも、馬嵬原の一夜に衰ふ。
きのふは錦茵に千金の娘たりしも、
けふは墨染のひと重の尼となれり。
されば
柏木衛門の夢、
虚堂和尚の詩。
戀にはまよふ、欄干に水ながれて梅花の朧なる夜、
貧にはぬすむ、障子に雨そゝひで燈火の幽なる時。
鼠は可捕とつくりて褒美は杜工部、
蛙は無用と誡しめて異見は白藏司。
昔は女三の宮の中、牡丹簾に輝やきて花正にはやく、
今は李四が菴の邊、天蓼垣にあれて實すでにおそし。
前世は誰が膝枕に契りてか、さらに傾城の身仕舞、
後世は必ず音樂にあそばむ、ともに菩薩の物數奇。
王の林の鳥も啼らむ、
蓮の臺の花も降らし。

涅槃の鐘の聲冴て、閻爐裏の眠たちまちに驚き、
菩提の月の影晴て、卒都婆の心あるゝか疑はむ。
如是畜生。
南無阿彌。

○玉堂隨筆　（二）　南石外史

人を監相すると

後陽主人高祖を視て曰く天下の主也と其女を嫁す、占者蔣吉郎を見て曰く天下を取らんと、蕃山と正雪と相遭ふ後に曰く公用ゆ可らずと。支那と日本には如此く人を相して物性を監察すると甚多く歴史上一種の快味を生ず然るに西洋に此事少なきは何ぞや蓋し洋風内外一致を尊び心の怒りは面に於て亦怒り心の樂は亦た外に於て樂まんとを勉む我國と支那との如く喜怒色にせずとの敎は海外に於て尤も斥けらるゝところ也故に自ら人を相識するの術少く亦如此きとを必要せざるに至れり我國及支那の如く內情を包藏するの處に於ては固より相術監察の力發達すべき筈なり。

東京出身の英雄

大凡そ偉勲ありし人に付て之を思ふに主府出產の人は下賤文なきの嫌あり故よ非凡の質あるものも之が爲に其地位を失ひたるもの多し。

言文一致の近則

言文一致を望み成べく言葉通りに文を書せんとするものは先づ文章の句節に點を附するとに着手すべし言には句切あり文に之なからんには勢ひ蓋しとか抑いもさか夫さか云へる接續詞を入れざる可らず隨て言文不一致の基となるなり。

シュメセー苦樂

シュメセーと云へる語は喜を喜こび悲みを悲しむをこそ言ふべけれ然るに今の習慣にてはたゞ人の哀を想ひやるのみに用ひて寧ろ同哀とも云ふべき字義となり世間の實際にてフモヒヤリある人と云へるも亦たかゝる妻となれり。とは何故ぞと云ふにヘブンは是れ神の裏にして樂は當然の規則哀は特別の出來事なればなりと云ひ又哀は人の助を要し樂は獨立するの性質あるより神の裏にてかく哀につき思ひやらせ玉ふなりと云ひプローンも亦ヘブンの第一說と同樣に說けり然れど是れ大なる誤にしてたとひ某悟敎理より云ふとも亦逆へる見識なり此世は樂をうくべき世にあらず苦は當然の事なり現世は樂あるとこそ特別の出來事にして想像し得ざる景況なりとも云ふべけれ思ふに人皆大抵苦しむが故に人の哀ば想像し得べく隨て思ひやりあり樂は自ら經驗せざるとゆゑ人の樂あるも其愉快を想像する能はずしてシュメセーなきなり見るべし人が非常に困難忍耐してさて樂を得たりと云へるとに付ては反て大なるシュパセーあるをこれ亦苦難せしその事に付て自らに引あて考へ得べきが爲なり。

琴三味線の五音

琴の音はカキクケコの音多く、三味の音はタチツテト多し。

孫を愛する多少

老母は其の實の娘に出來たる孫を愛すると其の實の男に出來たる孫を愛するよりも切なり、以て人情のありさまを見るべし。

初まり〳〵

○日本國の大さ

まだふみも見ぬ天の橋立生野を越て丹波のおくより親子づれ京內まいりをせしに、まことに京のにぎはひ商人の賣買、小路〳〵の繁昌、目をおどろかしてかの息子がいふやう、親じや人おらゝも方々をみれども、これほど大きな所ろは御ざらぬ、日本國と云ふはこゝの事かととふ。親仁聞てさても、さても分もなひといふて人に笑はるゝな親の恥じや、日本國といふはこれ三つあはせたほどあるといふた。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○物知りの親子

人間七十古來稀なる文盲人、子に世をわたし後世一遍にならんと思ひ隱居所の普請を企だて、大工に差圖などをさせけるに、息子を呼び材木の注文をかゝするとて先づ口に材木の事をかけと好めば、息子も親に似るならいにて材の字は何んと書きまするととへば大方知れたと先づ木へんに書けと云ふ、さてつくりはどうで御座るといへば、つくりは問ふに及ばぬと假名で書きおれ、これほど鈍では心もとない、まだ己の隱居はなるまい。

○大學校の師弟

面白き教師が私の近邊の學校にありまして、或日突然生徒に向ひ、

教「なんと皆さん、洋行しては如何です。

といへば生徒は呆れ顏にて。

生「デモ旅費も學資もありませんもの。

といふを打消し

教「ナニ學資や旅費はなくつても、あなた方が利用ずに貯へて置た時間がありませう、夫を集めてアメリカへ持て行けば、一時間十弗位にて欣で買て呉ますから、夫で何もかも充分整ひます。

又右の教師が或る時、宗教と文明の關係といふ話しから歷史を引証した末、

教「ソラ御覽なさい、木乃伊を尊んだ埃及の文明は、停滯不動で少しも進みません、埃及夫れ自らが木乃伊になりました。

といへば生徒が

生「夫では偶像を信ずる日本國はどんなになるのでせう。

と聞くと教師は苦笑をして、

教「金箔のように光るのでせう。

と答へました、教師も教師なら生徒も生徒。

或る日教師が境遇と性質といふ話しの末、

教「夫ですから閑靜な處に住ふ人は、どふしても、性質が高尚になります。

と聞くや否や甲生徒は自慢そふに、

甲「私の宅は極靜です、鳥の鳴く聲と水の流れる音より外に何も聞へません。

といへば乙生徒は負けぬ氣になり。

乙「私の宅は鳥も鳴かず水も流れず、唯シーンとしてをり

ます。
そこで丙は口を尖らかし、
丙「私の宅は一番靜ですシーンといふ聲も聞ませんから。

兒籃

○太陽への病氣見舞　　さごろも

大鵬と云ふ鳥は翼の長さ一萬里に及び滅法に大な鳥ださうてす或日獨りて考へるに世の中で己れほど大な者はあるまいしかし毎日かうぶら〳〵暮しても仕方がない何か人間などの出來ない恐しい事をして萬物の靈だなどゝしやれて居る奴の鼻を挫てやりたいものだコーツト幸ひ此頃天に居る太陽殿が風を引たとの事ダカラ御見舞に出かけよう己れが飛で行けば五六日もかゝつたら行く事が出來るに違ひない先づ少し辨當でも用意して今夜ゆつくりと羽根を休め明日の朝出立しようと其夜は休で翌の朝は太陽口懸て東の方へと飛び出しました御存じの通り地球から太陽迄は日本の里數にすると九千七百六十萬九千二百里餘(よく覺えてお置き遊ばせよ)ですものいくら大きな大鵬デモなか〳〵及もつかぬ事デス三日計り行ともう大疲れに疲れて仕舞休む所がありさうなものと四方を見ても何もありません腹は減る喉は乾く死さうな思をしてまた二時間ほども飛び行きましたするど不思儀遠くの方に見渡す事も出來ぬほどの廣い海があります天の奥へ空の中に海があるナンヅは今日の日迄見た事がない有がたい〳〵鯨の五六疋も居た事ならチットは腹のたしにもならふと少し元氣附て彼の海に行きますと鯨處か目高一疋居ません大鵬はがつかりしてさて〳〵困たものだしかし食物は無くも休む所位はありさうなものだとまた少し飛び行くと大な土手がありますその長さと廣さはなか〳〵計りも及ばぬほどです大鵬はやれ〳〵助かつたどれ一休みと彼の土堤へ飛下りマストやがての事にグラ〳〵と動き出し大な聲で。貴樣は誰れだ何者ダ斷りもなく己れの鬚へ何故とまつた。大鵬は地震だと思て居る處へ大な音で叱り附けられ恐しさに震へ乍ら私は大鵬と申すケチな者で御坐います太陽殿の御病氣見舞に出かけます途中あまり疲勞ました故尊公樣の御鬚とも存ぜず一寸と拜借いたしましたる事恐入り奉りマスしてその元樣は何者にておわしますや、己れか己れは百萬年の昔しより此の海中に住い居る鰕魚の頭梁と申す者あり貴樣のような小な奴が太陽殿の病氣見舞が聞てあきれる歸

れ〳〵大馬鹿者とサン〳〵に悪口せられてもなか〳〵力の及ばねばくたびれた羽を延して歸りました海老魚殿は大鵬のような小さなものが太陽の御見舞なぞヽ出かけるに己れのような大な者が行かず居れようぞと大急ぎて游ぎ出しマシタするとこれも二三日經つかたゝぬにそろ〳〵疲勞れ出した故少し休む所がほしひ者だと四方見廻すに幸ひ大なる穴がありました大喜びて飛び込みさて〳〵くたびれた己れでさえこれだもの小な鳥などが何で行けるものかと獨り言をして居ると聽ての事にハクシヨ〳〵と嚏の音がします。己れの鼻の穴の中へ斷りもなく這入りこんで困た奴だ一躰だれだ何者だ。ハイ私は太陽殿の病氣見舞に出かけます海老魚で御ざいます。馬鹿者め貴樣のような者が何で行けるものか小さな躰をして生意氣な事を云ふ歸れ〳〵。ハイ〳〵してそう云ふ貴公樣ハ。己れかおれは此の海に百億年の間住で居る龜子だ。

上の上にも上があります。出來ぬ望みを抱て氣張ても仕方がありません。高慢は人の惡みを受る元ですよ。

細君の解│妻は細務を掌り夫は大務を掌るゆえに人の妻を指して細君と云ふ○或は云ふ東方朔が歸て細君に遺ろ何んぞ仁なるやと云ふより出づ細は小なり背し命婦に大君の稱あり故に我妻を謙遜して細君と云ふ左れば人の妻を稱し細君と云ふは失禮なりと。

史傳

○文傑ジヨン、ミルトン　かすみ

堂々たる偉丈夫睥睨して立てり、傍わらに見る秀麗白面髪肩に垂れて尫弱婦人に似たるの一秀才、手に文書の堆を要して沈案す、是れ豈にクロムエルに伴侶たりしミルトンにあらずや。茅の屋根破れたる椽、旭日露を拂つて其の光を射來するとき、痩骨白髪の一老翁丸木の柱によりて外庭に面す、悲しむべし其目盲にして衣服甚はだ粗なり、左れど容色輝やき風采澤々として温威決して碎く可らざるを見る、此れ豈に余が尤も敬愛する文傑の末路にあらずや。

ジヨンミルトンは西歷一千六百〇八年英國倫敦に生る、其父極めて嚴格にして甚たく家庭の敎育に注意し、ミルトンを敎ゆるの日科非常に嚴しかりし、左れば氏が十二才の后ちは毎夜十二時に至らて寢に就しとなかりしと云へり、深く歎ず此の過度の勉學は終に後の大不幸を持來せしの主因となれり。二十四歲クライスト學校を卒業し、後ちパッキンハム州に在る父が別莊に退隱して靜かに獨學したり、學ぶ所ろは希臘語羅甸語の最好の書、高等の數學、音樂の理及實修なり。靜かに學ぶと五年、最早天下の人物山川を實見すべきの時と

なれり。二十九才父の許しを得て單裝し獨り歐洲大陸に經行す、豫じめ思へらく伊太利の文章高雅にして深幽なり、自から其地に到りて美なる風景壯觀を見るにあらずば、其文學の淵源する所ろ測る可らずと。故に途中佛國パリの都を過ぎれど其の華飾なる文物は氏が心を動かすに足らず、一走して伊太利ナイスに着し、フローレンスに渡り、此に彼のガリレヲと談論し、羅馬に留まると二月餘、次にチープルスに到り、將にシ、リーに行き、グリースに渡らんとしたる時、新聞紙は報じて云ふ、英國の議院は國王と大ひに爭ふ所あり、國情頗かに擾擾ありと、ミルトン之を聞き慷歎して云く、吾が國民は自由の爲に家に激昂せり、余れ獨り悅樂の爲に外國に遊ぶ可らずと、未だ文寶を探らず、殘念にも錦城を後に見て勃然として歸家す。

歸りて景勢を窺ふにミルトン未だ出づべきの時にあらざりき、則はち少年を集めて暫らく句讀を敎へたりしに、年月匆々として過ぎ、人心ますく自由に向つて叫び、革命の大勢遂に噴裂して一千六百四十九年國王チャールス一世殺害せらる○クロムエル代つて大政を握り、不世出の雄膽を以て國運を理整するとき、ミルトン則はち出でゝ之が大書記となれり。彼が雄健快達なる文章は外か各國の文書に應答して天下の學士を聾服せしめ、內ち諸ろくの反對論に答辨し得て自由の政理益々發揮したり、クロムエルを以て若し改革者の武力ありとせば、ミルトンは則はち其の文力を代表したり。

ミルトンの大書記たる、其の四十一才以後凡そ十二年なりき、此間だ彼が筆に依りて萬鈞の眞理を抽發し得たる極めて多かりし、然るにクロムエル死し、其子不肖、數多の改革者或は死し或は衰ろへ、新政府遂に倒れ、チャールス第二の即位するや、ミルトンは其の友人に殘されたる唯一人の生殘り手、而も尤も不幸なる生殘り手となれり。

即はち彼は盲人となれり、然れども彼が目の盲たるは其の靈能の光を消すと能はず、想像の明ますく燃え立ち、自由の精氣いよく鬱勃し、身外の萬事漸やく亂冷を極むるとき、彼が底ひなきの詩情は更にますく無限の吟調を歌ひ出しぬ、其の失樂園、復樂園、の大名詩は皆な如此にして成りたるなり。

彼は文傑なり、即はち文事を以て一英雄たり、古人所云る文門のヒーローなり、若し夫れ徒らに句を練り、喝采を貪ぼり、腰の弱き流暢なる浮文を綴り獨り得意とするものあらば、

如此き人は未だ決してミルトンを知り得るものにあらず。彼は其の容姿のよく〳〵しきに似ず、心腸に抜山の勇あり、彼は其想像の豐富あるに止まらず、極めて實在の眞理を確認したり、彼は言論自由の束縛せらるゝを見ては慷慨して筆を執れり、民權の壓制せらるゝを見ては慟哭して論難せり、然れども彼は決して一時の政論を爲すものにもあらず、悠々たる美念、洋々たる調音は限りなく彼が口より流れ出でぬ。

彼の歐洲に旅行するや、當初自ら誓つて云く、此行余れ先づ人に聞くを要す、故に宗教論の如きは敢て自ら信ずる所ろを強辨せじ、然れども若し問はるゝに當ては決して憚かる所ろなく論ずべしと、故に彼は法王權の尤も強大なる羅馬府の中心に於てだに新教を宣言したり。彼の老ひて盲し且つ貧賤にして窮苦するや、知友は悉とく失せ万境四面冷凄なれども、一と度びチャールス王の次子ヨーク侯の來り訪ふや、談笑氣平の間だ敢て前志を屈せず、侯が汝ちの目盲したるは先父を非難するの論文を作りしが爲にあらずやと云ふとき、彼は快笑して云へり、若し然らば君が父の殺ろされたるは天に反きしが爲めなりと。 彼は決して優柔なる文人にあらず。

或人は云く、ミルトンの文章は詰屈にして讀むに堪へずと、蓋し或は然らん、若し啻に流暢なると明晰なると糸遊の如く涓涓たる小泉流の如くなるを以て文の極美なるものとせば、ミルトンの文章は蓋し極拙のものあるべし、然れども静かなる細流の澄みたる淡色は彼の廣漠深濃なる大洋に於て求むべきの色にあらじ、ミルトンの文章の剛硬あるは其の文飾の沈重なるがゆえなり、辭ば淡にして隻字よく百感を動かし、文力重大にして理想尤も高し、若し夫れ之が文章を以て飄々たる幾多の輕文字に對すれば、恰かも是れ「大鵬白眼を擧げて大陽を睨らみ揚々として聲を發するとき、燕雀饒舌飛び廻はり騒ぎ立つ」に似たり。彼は少年の熱に由りて又酒の蒸發氣に由りて歌ひしにあらず、彼の永遠の神靈に熱信の祈禱を捧げ、天の榮光を確認し、地の消えざる火を白眼視し、上よりの第一天使に化せられて融々として歌ひしあり。故に論者云く、ミルトンが心に充滿し、警告し、感化したる三つの觀念あり、一に神に對するの義務、二に美術、三に政治上の自由と、即ち彼は第一の熱信ある信徒、第一の高き美術家、第一の自由なる平民論者として論じ且つ吟じたる也。 嗚呼今の日本文學界に何んぞミルトンを學ぶもの丶少なきぞ、文章の用は決して彫刻虚飾惰樂浮華にあらざる也。

○アッカルマン孃　　中川永輝

萬國婦人禁酒會の事業を擴張せん爲め世界漫遊の途に上りしもの曩きにメリイ、クレメント、レビット夫人あり今亦アッカルマン孃あり實に此會の爲め喜び祝すべし盖し孃が始めて本會の爲めに働きしハ四年前にありしが爾來キヤリホルニヤ或は英領コロンビアに到る處演說を爲し支會を設け其效績顯著にして其名聲日に赫々たり茲に於てレビット夫人に代り世界を漫遊することゝなり去る一月廿九日を以て布哇へ向け桑港を出發したり今在布哇ホノルヽ府婦人禁酒會々頭メリイ、エス、ホイトチー夫人が草したる孃に關するの通信を抄譯し以て孃の同島に於ける事業の一斑を示し以て孃が人と爲りの全豹を現はす。

アッカルマン孃のホノルヽ府に滯在中余は余の意見をも述べ孃をして充分に其働を爲さしむるには先第一に當府駐在の各國人に紹介するに若かずと信じたりき孃の當府に着せしは二月六日の朝なりしが婦人禁酒會々頭は電話にて當日重もなる教徒男女百餘名に通知し同日午後には一同會頭の寓居に集會しアッカルマン孃を歡迎したり同夜孃は組合教會の月次集會の席に臨んで孃がアラスカ地方に於ける傳道事業の觀察に付て一場の演說を爲し翌日午後には婦人禁酒會の貴女と相會し殆んど一時三十分會務上の問答ありて面白く其日を送れり余が玆に述べんと欲する所の者は同八日の夜に開きたる日本人と孃の會合なり玆に最も記臆すべきは日本人は飲酒の國民にして其國は飲酒の最も流行する國なるに當布哇滯在の日本人五千名の内千四百名は禁酒會に入りたるの事なり此事に就ては當府駐在の日本總領事たる安藤太郎氏及び夫人に謝すべきなり氏は日本に於て教育ある人なるが既に基督教を奉し其子息も亦教徒となれり而して氏は其全力を振ふて宗教及禁酒の事業に用ひたり氏は實に禁酒會の會頭なりアッカルマン孃も氏の招待に因り同會に於て演說を爲せり會場には草花を以て諸種の裝飾をなし“Dare to do right, dare to be true”の綱領を書き金星を以て之を圍みたり又背白色の紐にて飾りたる美麗なる花球をアッカルマン孃に贈りたり當日出席したるもの百餘名孃は起て一場の演說をなし安藤領事之を日本語に通譯せらる右終りて孃は出席者の中未だ誓願書（萬國婦人禁酒會の）に調印せざるものに向て調印あらんことを請ひたるに三十二名は直ちに其氏名を署して會員となれり先日高砂丸にて來航せし日本の出稼人の内に稲井なる者ありたり此人は現政府に對し過激なる議論を爲せし故を以て帝都三里以外に放逐されたる人にて兼て身延山の侍者なれば其政論に極端なる自由說を唱ふると同時に基督教に對して痛く反對するの人なり又佛教の新聞記者たりしこともありしと云ふ稲井氏は當時ホノルヽ府に於て日本人の基督教を信ずる者多きを見何か反對を試みんとて先つ安藤領事の宅を訪ひ領事に向て基督教に對し種々の難問を爲せしに領事は一々之に答へ且福音の教理を說明したりき美山貫一氏も其席にありて安藤氏と共に懇々勸諭を爲し十誡の第五に至り稲井氏は一朝迷夢の醒めたる如く豁然として悟る處ありて飜然前來の罪を悔悟し神に感謝すると殆んど一時間余も號泣したりと自分も小兒以來斯の如き號泣せしことなしと云へり氏は此より聖書を讀む日に何回となく祈禱感謝を爲し日本に基督教を擴張するを以て其終身の事業となし在日本の佛教徒にも信書を贈りて基督教の日本に欠くへからざる事を切論し悔改せんことを勸告せり今や神の榮光に因り氏の無政府の政略は靈界の中に埋沒し基督に忠實ならざるもの等は其國を救助維持する能はずと信ずるに至れりとぞ此夜はアッカルマン孃は布哇禁酒會に明日は外人の同會に演說をなす筈なりと斯の如く同島に於ては孃は諸人の贊助を得たれは其好結果を得たり云々。

千八百八十九年二月六日ホノルヽ府に於て

メリイ、エス、ホイトチー

獅子を追拂ふ大同團結

小　説

○あるのん物語（其二）

あめりえ　らいぞす著　美妙齋　たより　合譯

やがて別れ去るとなれば、私は腕であせなすを掻き抱いて接吻しました――而もあまり愛らしさに目にまで。處女も私の胸に頭を當てゝ私を抱へましたが、その頭の香が私の鼻にとほる心地よさ！　實にどうしても世界に愛嬌ではあせなすに越すものが有りません。で、この日から處女の精神は私には妻となつて、もはや天地の間われ〳〵の縁を斷ち得るものは決して無いと私は考へました。

その夜私が家で家内の人々と夕飯に坐ると、じやふェすが私が妻の無い事を喋々して、そして一坐が殘らずそれに同じて私を嘲けりました。で、私も悒々しく、直にその場を立つてしまひました。

すると、私の父が後から跟いて來て、わたしの肩に手を掛けました。「大層怒ッたでは無いか。御前も最う配偶を持つ年では無いか。そして初孫の顏を見るのがわたし達の嬉しいことでは無いか」。

「はイ、しかし」。わたしに是れだけ言はせたばかり、父は言葉をつゞけました、「ね、もう嫁を取る年だ。から、私ももう撰んで置いたよ、この國で最も正しい人の娘を。實に正しい人の娘といふは是ばかりだ、それを御前に撰んで置いたよ」。

「何といふ人ですね」。

「あ、ほんに、いゝ娘だよ、妻として愛はつなげる。名はこずびと言ッてびらァの娘さ。びらァは阿母さんの友だちで今から丁度一年前葡萄の苅入頃死んだて」。

生前したしく居た頃びらァが私の處へ來るとこずびも一途に來たのは私も知つて居ました。が、たとひ父にはこずびが美くしく〳〵――日光よりも鮮やいて――見えたにしろ、私にはあせなすが猶あてやかに思はれました、でもあせなすは私の精神には光りですもの。

それ故に私は父に言ひました、「あら、左樣ですか、阿父さん、しかしそのこずびが私を嫌ふかも知れますまいが」。

「いや、決してそンな事の無いのは私が承知だ。氣を引き立てゝ婚禮するがいゝ」。

ふたゝび手を私の肩に掛け、「御爲、御爲」と言ひながら宛然調子を取るやうに指で肩をぽつ〳〵彈いて居ます。

逆らへば平常の婉しさに似ず機嫌を損ずるのが私の父の性質、それゆゑに私も大きに當惑し、ほとんど胸もふさがりました。　肩に掛けた父の手をわたしは取つたばかり、只無言です。が、不圖打明ける氣になりました。　胸の轟きと伴なつた聲の慄戰、それで斯う言ひました。

「阿父さん、實は私は一人の處女と——美目よくて德に篤い——そして處女も私を愛しまして、末は夫婦になつて、あなた方の子となりたいと申して居りました」。

これを聞くや否や父は忽ち空のやうな、海のやうな青い目元に眉をひそめた工合、さながら青玉に雪を降らせたやうです。

「その女の名は？　答へたら返答の仕樣もある」。

「あせあす」、只わたしは斯う言つた丈でした、處女の親の名を打明けるのが氣味わるさに。

やがて父は返答しましたが、早恐ろしい聲で、また目も赫く日に映る海のやうに兇めきました。私の肩を掴んで衝きました、私を睨め下しました——私の身長は高いながら父のは尙でしたゆゑ——そして高い聲で、

「氣が違つたか御前は、ま、あの不信者の娘と夫婦にならうとは」。

何う答へていゝか分からず、たゞ掴まれた指先の痛さに身を引きました。

「いゝや、挨拶しろ。　それまでは動くな、すこしも」。

で、私も仕方なく靜かにして何と言はうと思案せりしばらく。終にかく答へました、

「でも娘が不信者でありませんなら假令それを愛しても」。

「しッ、あら貴樣もよく〳〵な馬鹿ものだ。　惡根性は遺傳するのを知らないか。

「しかし、不信者の子にしろ、正しいものを愛していけぬと言ふ事は私にわかりませんが」。

「あゝの、そゝな事、あゝ貴樣も最う惡黨の一人だ。その返答は大罪だぞ」。

そして猶つきはなして戶口を指さし、「出て行つて熱がさめるまで散歩して來い。　それから己から神樣に御詫を申さないでは——神さまは私の前に居らつしやる」。

言ひ捨てゝ内へ歸り、戶を閉ぢてしまひました。」

折しも月は空に掛かつて居て萬物が浮べて白く。山の松は蒼黒い空の面に白銀の流蘇を埀して居るやうで、そして月は

天上の清い光を下界に通ずる唯一つの途など、も思れます。
まだ名殘の茜は燃ゆる火の餘命を繋いで居てそして其の間に黒ずんで散ッて居る雲は巨人が書き捨てた文字の痕のやうです。
巣の中では鳥が眠さうな話しをして居て、そして夜風は山の角々に囁いて居ます。
段々歩いて居る内に身躰も次第〳〵に疲れては來ましたがしかしいよ〳〵燃えて來たのはわせなすを懐ふ情で、いつそ父にも神にも罰せられても——洪水で溺れて死んでも——搆はぬからわせなすとは離れたくない、どうしても離れるのは否だと終に妄想が蔓ッて來ました。
行く〳〵此事やまた人間世界にやがて掩ひ掛る災厄を考へて居る内に、見れば、私は早一つの高い山の絶頂に來て、ろして地面は遙か下の方にあつて、夏の月は地の美くしい胸を掩ふ夢の薄衣——むしろに眠る女の胸を掩ふ薄衣——を洩てほのかに照ッて居ます。 銀の糸を欺く川、落ちた星と見える湖、および嵐の空を馳せる雲に似た森。 すべて私の心は母のやうに地を懐しく思ッて來ました。

水の性清からんが欲す沙石之を穢し
人の性平らがんと欲す嗜欲之を害す(文子)

○酒鬼　(其一)

藤髯主人

寒さ！ 下駄の音遙かに響き人聲の夜半を送る寒さ！ 月は冴て隈なく輝せば輝すほど寒き光。 闇ならば轢くまじきに：：凄き犬の遠吠。 哀を添ゆる按摩の笛。 是と共に寂しさを破る雁の一ト聲。 霜枯時の悲しさは又格別にて、牡を呼ぶ鹿なければ空しき閨を嘆つものあらねど錦の帳に垂籠ては知られぬ悲しさ。 無殘にも北風は梢を拂ふて連字窓に攻つける、其刃には海獺の帽子絹布の夜具も敵しかぬるを。 まして一枚の袷——袷ならばまだしも、肩ばかり三重に裏は破れ海松の如き衣を纏ひ。 破障子を通す空氣に明滅する手らんぷを燈しに心細氣に襤褸二ッ三ッ取合せて繼物をする六十餘りの老婆。 しばし手らんぷを見詰てホット歎息、何故ぞ：：凹き眼より洩〻水二三滴皺に溜るを震へる手にて拂ひ。 思出した樣にット立て琉球疊のほつれに轉けかゝるを其まゝ二歩三歩、古新聞にて張たる襖を開けば儀式ばかりの持佛堂。 眞鍮の香爐花立は三年も前に屑屋の籠に入りしに本尊の彌陀佛今にくすぶり給ふよ黄金の肌を現はし給はぬと覺ふ、鎗一筋の御士樣の御邸には珍しき出來合の木佛」と堀出し物に妙を得た道具屋の物語。無殘や清淨の佛壇も鼠の爲に荒されて、惡臭の中に倒

れたる眞黒な位牌を老婆は叮嚀に起して正面に直し。塵埃の中から掻集めたる安息香の折を缺損じたる油皿に焚き。暫くは口のうちに念佛、頓て薄暗き佛壇を見詰め眼をしばだゝきしが涙のせきはきれ、たまり兼てドッカと坐し風に搖々油烟に顏背け水鼻と共に袖で拭き、怨めしさふに佛壇を見上る其憐れさ。眼は凹み皺は寄り骨顯はれて疲こけたれど何處かに殘る品格は昔床しく思はる、思はるゝだけに憐れさも又ひとしほ。門札に靜岡縣士族の肩書あるを見れば昔は多分何千石かのお邸の奧樣、かりそめの用にもコレよと腰元を使ひし身分。時世とは云ひながら……噫氣の毒。

サット來る風と共に勢よく戸をガラリ「お須摩……」

苦々しげに老婆は入口をながめて「お須摩は居ないョ……又お前醉て來たナ」

「ナニ居ねエ、ゲーップ……亭主の留守に何處ェ行きやがつた、馬鹿め」

口小言と共に障子を開くれば酒氣フンプン。熟柿の樣な香をさせるは三十の上——早や四十にも近き筋骨逞しき男。縫目綻びたる小倉の古洋服を素肌の上に着て、白ならば汚れたる——鼠ならば褪めたる木綿の三尺を卷き。髮は蓬の生へたる如く髯ムシャクシャ、朱漆の樣に顏赤くして眼も血走り。舌舐ずりしながら左の手に持ちたる豆絞りの手拭包を投出し。右の手にさげたる貧乏徳利を口にあてがひ其まゝグット一と呑、胸を突出してゲエー。老婆はあきれた顏。

「お前、月給は持て來たかイ」

「月給……持て來ました、今日は大盡サ」　急に眼を据へて「お母さん、お須摩は何處へ……」

「お須摩かエ、お須摩はアノ……お邸へ」

「お邸へ、人……わらかせやがらア。お邸〳〵つて無暗に……なんだ亭主の留守に、人を……」

「なんだナお前、かふして居られるもお邸のお影じやないか。お前月給はホントに持て來たノ……持て來たならお渡し」

「お渡しタッテもう有りやしない。ソンナ……お母さん、野暮だよ剛ひ顏をして。平生碌に食べさせないから……サァお母さんお食べなさい」

豆絞の手拭を解けば竹皮包、橫町の夜臺店を覆へした稻荷鮨。「サァお母さん」と進めながら一ッ頰張り、手近な湯呑を取りて茶碗酒。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

「お母さん、今日はチあの久保村が恐ろウしく醉張つちまつて伊勢久の番的を、オイお母さん……お聞よアノ久保村が……からモウ頭部六になつて『オイ番衆……』アハゝゝゝこんな調子サ。オイお母さん、いやに澄し汁ときましたナ。ナニなぜ酒を飲んだ、酒を飲んで悪けりやア酒が……イヽヤ僕が誤る閉口……頓首……謹言。お母さん、是ほどにお詫をしても許されぬ……トハ道欲。チエお母さん一杯飲んで……チツト浮々しやしやんせ」

母は見向もせず、眼に一杯の涙。醉て誤るならばなぜ飲みしぞ、浮々しろと曰ハずとも酒飲まずして歸らば此母は嬉しきに。我子とハ云ひながら四十にも近き分別盛、世間並ならば子に異見する年でありあがら……。涙に聲を掻曇らせ

「作次、お前今も……」

「御異見、恐縮(兩手を廣げて)……マア……マア、お母さん聞給へ。僕はモウ禁酒、否ヱ昨日は一滴も飲みません……ダもんだから今日もズツト歸らふ……ト思ふと久保村が『ナアンダ山澤意氣地がない……』と云ふ樣な寸法で、ゲヱー……もう恐れ入た。明日から禁酒……禁酒」

怨めしさふに母は我子の顔をながめ涙を拂ひながら

「禁酒はいゝが、お前……今日は……」

「イヤ禁酒します、御異見お預け。こわい〳〵……由良之助でこざるぞ」

コロリ臂を枕、由良……之助と云つたまゝ眠る。母は涙片手に摺寄り「作次……作次……」と搖れば、はや寢惚聲で「禁酒……由良」。何事ぞ……コレ作次、酒に生根が奪ハれしか。昨夜もあれほどまでに言聞かせしに――言聞かする年でもあけれど。外の日とハ違ふ亡父の命日、幸ひ月中旬にて砲兵工廠より賜はる給料、僅かなりとも心ばかりの供物せんと思ひ。心待にせし我子の歸り、よもや今日こそハト頼は仇とありて七時……八時。位牌を直す氣も失せて――今朝食べしは唯一碗の粥。我子の持歸る半月の給料を力にし、久々にてたきたての御飯に味噌汁をと心頼は丸山の鐘と共に數盡し。最早勘忍のながりたき我子、總領の男とて乳母をも置かず、あくびをしてもハテと首かゝげ、ワツト啼く聲に胸轟かし、寢れば寐るで又物案じ、驚風疱瘡さては麻疹、一時だに落付し間なきに、十六と云ふ曉友達に誘はれて向島の櫻が病附、父祖重代の長船を質入せし時の亡夫が立腹、泣て眼を腫せし事もありしに――夢にまで魘はれし夜もありしに、此ほどに恩ある

此世、此丗を……苦しめるとは何事ぞ。是も罪障とあきらめても……あきらめかねる因果。不便なは嫁のお須摩、悴を大事にして呉れるだけ尚ほ不便。憎き悴、亡父の命日を忘れるとは……おのれ、是を思へば驚風をわづらひし三歳の時、あれほどに手を盡さずば今日の苦勞はあるまじきに、我命を縮めてもト金比羅樣に願ひしは馬鹿らしく。其時は願の協ひて有難かりしも、今は聞へませぬぞ……金比羅樣。

寄書

○倫理の基の要旨

湯淺はつ

一、一夫を以て數婦に接するは自然に反す、何となれば歐洲各國の(伊太利は女子の數男子よりも少き故之を除き)人口を男女に區別するに女子の男子に超過するは僅かに百分の三、七…即三分七厘餘に過ぎればなり、又歐洲各國生兒は男子常に多くして女子常に少なく十七歳より四十五歳までは男女の數平均すればなり

一、一夫を以て數婦に接するは人情に背く、何となれば婚姻の趣旨は男女情を盡して相愛するに外ならざればなり、情愛を他に分ちて情愛專らならざれば夫婦の關係消滅すればなり、有妻の男子他の婦人に接するは姦淫なればなり、有夫の女子他の男子に情を分つを以て人情に背くとすれば、有妻の男子か他の婦人に接するも亦同しく人情に背くものなればなり。

一、一男子四人の妻を有するを許されたる亞剌比亞人すら近頃は一夫一婦に滿足し、一夫數婦を制とするモルモン宗も米國政府より公然一夫數婦の制を取るを厳禁せられたり。

一、我國は女子の數却て男子よりも少なし則ち十九年に於て男子の數一千九百四十五萬千四百九十一人女子の數千九百〇五萬六千六百八十六人にして男子百人に付女子九十七人餘なり、斯の如く女子少なき國に於て一夫を以て數婦に接するは決して自然に適當するものにあらざるなり、他の日本の男子より其の配偶を奪へるものなり、日本國に於て自然に成立つへき家族を滅ぼすものなり。

一、然るに我國の中上等の家には蓄妾の風習甚だ盛なり蓄妾より生する弊害は

第一　夫その妻を虐遇し、一家不平となり、夫妻その居を別にするに至る

第二　人間の快樂中最も眞實に最も優美なる家内の快樂を奪ひ去る者なり主人一人の肉欲を逞する爲め父母妻子の快樂を犧牲とするものなり。

第三　妾たるものはその家財を盜まんと欲し、その子を戸主となさんと欲し爲めに一家を攪亂滅絶せしむるに至る。

第四　兒童の圓滿なる發育を妨け、皇天に對し社會に對し大切に教育せざる可らざる兒童をして偏僻不淡泊ならしむ。

第五　一家は一國の基なるを以て一家の不平攪亂は一國にもその關係を及ぼすなり、又た社會の上層に位する人の一擧一動は一町一村より一國に波及するものなれは、上層の人か數婦に接するは姦淫の毒瓦斯を社會に流かすものなり。

第六　子たるものは父の爲す所を擬するを以て姦淫の惡習は後世にも傳はり及ぶなり。

一、我國に於ては正妻と妾婢、正嫡と庶子との區別判然せざるか故にこの弊害殊に甚たしこの區別を立るは甚た必要なり、英國の如きは私生兒は合法相續人たるを得す。

一、一夫數婦の弊を救ふの第一法は基督教によるにあり、儒教は道徳の活氣なく且つの數へ妾を卑めす、佛教は女人を以て惡人となし、佛の熱心なる信者の中若くは高僧の中には數婦を蓄ふるもの多けれは以て頼みとするに足らす、只基督教は一夫一婦を主張するものなれは必ず之によらざる可らす。

一、その第二法は法律上男子の姦通を制する之れなり、刑法第二百五十二條は左の如く改正せられんとを望む。

現行法　有夫の女姦通シタルモノハ五ケ月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其ノ相ヒ姦スル者又タ相同シ

改正案　有妻ノ男子若クハ有夫ノ女他ノ男女ニ姦通シタル者ハ共ニ六ケ月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦相同シ。

又た民法若くは婚姻法の如きものに於て男女の姦通を制する爲め左の箇條を設けんとを希望す。

一　姦通トハ有妻ノ男子若クハ有夫ノ女、他ノ男女ニ接シ又ハ有妻無妻ヲ問ハス有夫無夫ヲ問ハス他ノ有妻男子又ハ有夫ノ女ニ接スルヲ云フ即チ有妻ノ男子ガ妾ヲ置キ婢ニ接シ藝娼妓ニ接スルカ如キハ皆姦通ナリトス。

一　夫婦ノ中何レナリトモ姦通スル時ニ於テハ其配偶ハ之チ裁判所ニ告訴スルヲ得ベシ、而シテ姦通者ニ向テ相當ノ償金チ請求スルチ得ベシ、然レ圧ソノ償金ハ姦通者所有ノ財産ノ二分ノ一ニ超ヘカラス。

一　姦通ハ離婚チ請求スル正當ノ理由ト爲スコトヲ得ベシ

開書

○敢て女學記者に呈す　築地　長澤豐子

女學雜誌記者足下よ足下去月六日發兌の女學雜誌新報欄内に於て亂暴者横行すと題し神田區役所本郷梅毒病院邊に深夜徘徊する破廉恥の暴人淑婦優女を害することを慨歎せり其忿怒の氣は筆先に現はれて凜乎たり然るに去二十日發兌の貴社雜誌に於て忽ち鐵鞋氏の優温なる綿布に包まれ爲めに鋭鋒も鈍きを感せり然るに記者ハ敢て一歩を讓らす凜乎として日不幸にして余鐵鞋氏と同する能ハす吾人ハ平生危を避けよと曰ハんより危に勝てよと曰ふ者なりと嗚呼記者足下よ何爲ぞ夫れ過を改むるに吝なるや余ハ常に記者優美高論に服せさるハなし然れども亦た其頑固堅く守て降らさるに驚かさるハなし吁是れ記者の一失か抑も亦た余の愚鈍か未た之を知る能ハすと雖も貴社二十日發兌の女學雜誌に於てハ吾人か前言豈に一時の激昂により大事を誤る者ならんや云々と曰ハんよりも寧ろ言を轉して優美の女子等よ成丈深夜の通行を止よ其德を傷ふと勿れよと又「危を避けよと曰ハんより危に勝てよ」と云ハんよりハ避くへきハ避けよ避く可らさるハ勝てよと云ふこそ平生淑德優美の女子を生出するに孜々たる女學記者の當に云ふへき至當の言ならめ吾人囑望する所の記者よ願くハ過を改むるに吝なる勿れ向來大に望みあるの女子をして善惡を判するに迷ハしむる勿れ唯た願くハ吾人をして It is right in theory. の歎聲を發せしむる勿れ吾か最も囑望する女學記者以て如何となす。

時事

○國家の富強は其の基に在り

政治界は此れ至大の働らき場所也、此所に出でゝ純正公大の元氣を主張し、先づ政治法律を潔ぎよくせしめて而して萬民を德化するは大丈夫の當に務むべき所ろ、國家に大任するもの、尤も注意すべき所ろたり、然れども之れのみにては決して足らず、特に今の日本の時勢に於ては更に尤も之にては足らず、思ふに今日は先づ國家立脚の地に注意すべき時なり。諸君若し虛榮名利の爲に生んと欲せば須らく騷ぎ立つべし、吾人は倘ほ水平線下に泳游して大ひに爲さゞる可らざるの事あるを信ず、三十六鱗吾事了、歡聞故友化爲レ龍。

○監獄の改良

監獄改良の問題は今や滿天下に注意せらる。況んや我國の監獄の如きは、志士の一朝之に囚はれて出づるや多くは之が改良に從事せんと云ふに由りて、此事業の當今に切要なるを知るべし。去月三十日監獄協會の發會式に於て、伊藤博文伯は云く、

現時我國に起りたる諸般の改良中獄政の改良は殊に重要なるものとす故に既に監獄協會の設立を見るも單に之をして將來に存續するのみに止めず宜しく近代の改良主義に基き以て其効果を收むるとを努めしめざる可らず…今日の監獄は昔時封建時代の比にあらずと云へども未だ滿足すべきの逆にあらざるを知らば宜しく政府と共同して之が改良の目的を達するを期せざる可らず。

三條實美公は云く、

監獄の設は以て罪囚を懲害するのみに非ずして將來に不良を化して良と爲すの効用を收めしめむとす彼れ亦た國の赤子なり一時迷誤の爲に不幸なる邪路に彷徨する者なり之を懲治の間に誘掖し化して良民たらしむるは慈善家の當に務むべき所ろたり。

山尾庸三子は云く、

社會改良の事一にして足らずと雖ども監獄事務の如きは他の百般に比して其歩武猶ほ數十里の後にあり今にして之が改良を計らざる可らざるは固より論なきのみ…獨り監獄に至りては猶ほ寥々として之を顧る者少し或は其事の卑且つ惡徒罪囚を禁錮するに止まるものとなすが故か豈に夫れ然るものならんや。

博士中村正直君は云く、

抑も余が身ミ雖ども殘齢の存する間は「今より後も惡道には入らぬ」さ立派に言ふことは出來ぬことなれども顧みて斯世に同じく生活せる人にして罪惡に入りたる者を觀れば先づこの人の不幸を感ぜざるを得ず次ぎ余身の幸福を感ぜざるを得ず恰も盲聾唖の三者の不幸を感じ次に余身のこの不幸を免かるゝの幸福を感ずるが如しかくの如く彼我相對比してこの感想を發する時は吾が幸福を得たる餘力を以て彼が不幸を救助せんと欲するの念油然として生ぜざるを得ざるなり且つ又余が身も行末永く惡道に入るを免れ曾子の如く重荷を卸して吾知免夫さいひて實に愉快の極なる往生を遂ぐるを得んと希望に堪へざるなり。

人間は境遇の活物なり故に塲合に由て善惡眞僞是非邪正の變あるとなり勿論薑辛糖甘其の性變すべからずと雖も橘は淮を踰ゆれば枳と爲るとも言へり余が身の幸福なるに由り今まで罪惡を免かれたりとも之を以て「余こそは監獄中の罪人よりは性を異にせり余こそは決して彼か如き罪惡は今日迄爲すを欲せず今より後も爲さゞるべし」と斷言せば淺薄なる思慮といはざるを得ず。

政海いよ／＼騒がし。此時に當りて如此く靜かに監獄改良の必要を論辨せらるゝ者の多きは、當に國家の爲に大慶すべきとなり。願くは女性中にもフライ、マーテンの如き熱愛眞慨の改良家大いに起らんとを、謹んで祈る。

〇刑法民法に關するの請願

事を行ふに尙早しと云ふとあり、然れども正理を論ずるに尙早しと云へると決してあらず。人に向つて正理を說く一日も猶豫す可らず、政府に向つて正理を申告すると豈に一日の猶豫すべきあらんや。　婦人矯風會南部に於て刑法の改正民法中の箇條に付きて政府に請願する所ろあらんとし、之に贊成して署名すべき同志者を募る、請願書の大意は本號寄書欄内に湯淺はつ子の要旨を記るされたるあり、贊成者は男女を問はず只丁年以上の人に限ると云ふ吾人は尤も此擧に贊成し其の志す所ろの貫徹せんとを祈禱するもの也、請ふらくは滿天下淸德の士、切に發起者の微衷を察し、深く我國現今の大弊元に着目し、奮つて此の至正至美の告白に贊加署名せられんとを。

申込まれんとする人は來る十五日迄に麻布仲の町二十番地黒川恒子（南部矯風會書記）に向け通知あるべしと云ふ。

〇日本人　　博愛子

高天に泣禱して、尙ほ怒るとを得ば其の怒や正しきなり、劍を握つて慷慨し慷慨少なくとも十數日に續くとを得ば眞の慷慨あり。然るに天に大道理あるを知りて徒らに夷狄禽獸視するの古僻を再たびし、地に進化法の行はるゝを知りて暴りに保守頑陋に加擔し、時に無責任の壯語を吐きて吾れ愛國者なりと云ふは、豈に今日の日本人の爲すべき所ろならんや。願くは億兆が愛敬し奉まつる我宮室を以て、啻に雲深き機械的の殿上となすと勿れ、吾等は人間としての情を盡し臣民としての心を盡し精神を盡し、極盡に我が至聖の宮室を愛敬し奉まつらんと欲す、然るに若し今日に於て尙ほ人民を愚にし、將に近づかんとする十九世紀懷疑的の批評の恐るべきを察せ

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ず、漫然として此の日本人は久しく偶像を拜するものなりと云ふ者あらば、其人や決して日本國の良臣にあらず、日本皇家の忠臣にあらず。

○英國女權擴張案

植村俊平

在英國法學院植村俊平君は、此頃左の書信を送られたり、

（上畧）此頃國會開會中にて女子參政權案も提出になり居り候が多分通過せざるとさ存候又ロンドン府會議員中に二人の女議員あり又其長老中に一人の女子あれ共其地位に就きては疑問あり現に女議員の一人に對して故障を法廷に申立たる者ありて裁判中なり是れは法律の文中に不明瞭なる廉あるを以て此混雜を生したるとに御座候日本の國會府縣會等に關する法律中には明かに男子さ記したるを以て右の如き混雜を生ずる憂は無之事と存候右申上候如く英國にて女子參政權の法律は未だ容易には國會を通過せざるときは存候へ共今日の勢を以て二十二年前にジョン、スチュアルト、ミルが始めて同議案を國會に提出して世人の嘲笑を受けたる當時に比するときは甚だしき相違有之事さ存候概して英國人が同志を結合し其の勢力を以て新主義の實行を企圖し百折撓まざるは從來其例多きとにして女子參政權を主張する協會も追々其勢力を加ふる樣子なれば數年の後に之を實施するに至るは豫め期すべき事柄と存候本月二十一日に該協會の年會ありし故に之に臨會して其樣子を傍觀致候に中々盛大なるに驚き候別紙に當日の議題并に議論の大要を記したる新聞紙切拔を差出候間御一覽被成下度候就中小生の最驚きたるは婦人の雄辨なるとに御座候同席にて演說せる國會議員も數名有之候ひしが其有名議員に匹敵するに餘ある妙齡婦人の演說ヱは一同舌を卷き候又一昨日死去せし有名なるジョン、ブライト氏の弟にしてジェコブ、ブライト（國會議員）氏が熱心に此改良を主張したるは其兄が諸般の改良に奔走せし精神を得たるものならんさ存候兎に角來月十七日に此件の議案を議する都合にして之を賛成する議員は保守自由兩黨中に百三十名許もある由なれば其日に至らざれば兎々の結果は不相分候又當國にては男子の外國に移住する者は年々夥しき數にして女子の獨身者は次第に增加するとさ被考候又女子の教育職業も次第に進むとなれば女子にして寧ろ獨身を望む者も有之趣と存候隨て女子職業の競爭は隨分烈しきとと相察候又種々の教育慈善に從事する女子の數も多き事と存候以上は今日迄小生の狹き見聞に逹したる事實觀察を其儘に申述候從來日本にて諸般の改良を主張する者は多くは進て取る事に汲々として顧みて自ら責むる事には一向無頓着なる塲有之候與さ相考候然るに英國人は自治の人民と誇稱する丈けに先つ自ら責め自ら盡して然る後に進て取り出て求むるの順序を誤らざる者と相察候日本の男子さへも果して自治に適するや否哉か疑はしき際なれば其女子にして同一の地位に進むは更に一層の困難あるとと存候乍去日本の女子に關係して小生の意見を述ぶるは此書面の盡に無御座候間左樣御諒察被下度候匆々不備。

三月廿九日　岩本詞兄研北

英京客舍　植村生再拜

右報告中賛成議員百三十名許云々とあるは蓋し誤寫に出しならん、右賛成員の數は年々に增加し來るとなるが、昨年の議塲に於ては實に左の如き人數にてありしなり、

下院議員總數三百五十九人の内

保守黨員にして賛成せる者……………………一七三人
改進黨員にして……………………………………一〇九人
分立改進黨員にして………………………………二七人
愛兒蘭國民黨にして………………………………五〇人

因に云く尙ほ近着の新聞紙に據て見るに去年此の案を呈出したるはワルター、ブライト、マクラーレン氏なりしが本年はウーデール氏なりと云へり兩氏ともに其氏の改進黨に屬す而して此案は婦人撰舉權中央會（C.N.O.W.S）及びプリストル婦人改進黨會に於て特に盡力し賛助するよし中にも此のプリストルの會は尤も勢力ある婦人改進黨の會にてジョンブライトの義妹プリーストマン孃會長となりジョンブライトの娘クラーク夫人同義妹タンナー夫人並にスチウワートミルの妹コルマン夫人等副會長となり居る由。

本年と云へども此案の通過成効せんと甚はだ覺束なし、然れども何如に直ちに成効せざるに拘らず、ヂリ〳〵と進取して年々漸次に輪勢を盛んにするの處置は、吾黨が謹んで學ぶべき所ろのもの也。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

内報

○赤十字社婦人看護會　は過般同社總會の節看護法卒業者二十四名へ卒業證書を附與せしが右に付補欠生募集の爲め去る六日同會役員曾婦人の會議を開かれたる由又同卒業生は成るべく同社に使用する筈なりと。

○ツッサル婦人　東京府高等女學校にては伊藤伯が是迄英語教師として雇ひ居りし米國婦人ツッサル氏を去る七日より雇ひ入れられたり。

○京濱婦人春期親睦會　は去る四日横濱海岸教會々堂に於て開かれたるが非常の盛會にて午前は四百三十四餘人午後は五百人餘の來會者あり且つ聖書を皇后陛下に奉呈するとに議決せしと云ふ。

○華族女學校々長　同校長西村茂樹氏不在中校長代理を同校幹事北澤正誠氏に命ぜられたり。

○横濱共立女學校　前號にも記したる如く宣教師方の手に屬する女學校に追々さ日本文學研究の盛んとなり行くは賀すべきと也、今ま京濱間の女學校中英語に熟達すると尤も巧妙にて寧ろ英語文學專門とも云ふべき傾きありし二百十二番の共立女學校にも校内に設けある研習會いよ／＼盛んさなると聞けり、此頃ろ同會の小史を寄せられたるに云く。

本會は今を去る三年以前數名の姉妹相集りて此れが設立を計り平常學ふ所を研練習熟して專ら實用を試み女子の淑德を進めて眞正の學問　精神上の練磨を務め後來社會の浩舞臺に昇る可き用意に汲々たりしと雖も從後不幸にも會員の退校其他の妖雲驟雨の爲に其枝葉を打たれ滿山の紅葉忽ち吹き散らされて僅に松柏の點々たるを見る有樣なりき此の間或は本會の進步を計りて治者の權力を貸與せんとするの場合在りしさは雖も會員の獨立自治の精神は校則の助力を辱ふせず全く生徒の自製物として只に其贊成を懇望し散り殘りたる木の葉を集めて勇氣を温め遂に昨年十一月三日皇國の大典と共に改めて第一會を開きし以來時に雨霜積雪の難なきに非すさ雖も幸に枯凋に至らさるのみか春陽の來るさ共に益々其萌芽色澤を現せり殊に近來速に員數を増し今回の如きは廿三人の同志を得今既に四十餘名の團結さ成れり妹等の喜悅又禁する能はず只今後綠葉鬱茂するとき希くは本會の主義たる根本を養ひ以て社會を支ふるに足る可き良材堅器を出さんとに各孜々汲々たる者也。

○番町基督教女子青年會　組合教會に屬する番町教會には此頃ろ題名の如き會を設け、聖書の研究、懇話、傳道の三事を主として牧師を助け盡力するとを務めらるゝ由。

○文學寮附屬女學會　は從前の組織を一變し更に文學寮の附屬となし將來は完全なる學校となすの目的なる由にて教員へ文學寮より兼務せらるゝさ云ふ。

○釧路婦人會　は本年二月二十日第一回を釧路眞砂町各宗布教場内に開き三月七日に第二回同廿四日第三回を同所に開き毎回有益なる法話等ありしが追々盛大に赴く有樣にて東京婦人教會及び上毛婦人教育會と聯絡を通するとに決したる由。

○京都婦人慈善會　は去る四日京都盲啞院に於て例會を開き赤松連城、足立健三郞兩氏の演說ありし由。

○結婚並に離婚數　青森縣内に於ける昨廿一年間の結婚者は五千四百四十七人にして離婚者は二千四百二十九人なりし由。

外報

○マウントホリヨーク女學校　本年秋季より同校の校長はメレー、ブリグハム孃(Miss Mary A Brigham)となる由、同孃は素と此校を卒業し、二十七年教授エスト氏ブルックリン、ハイツ、セミナリーの校長となり、ウエルスレー女大學の校長とし助て二度び推撰せられんさしたる人也。

○ペンシルバニア女醫學校　去三月同校に三十六人の醫學女生卒業し、其半數はペンシルバニアの人、余は他の州、印度、ロシア日本等より留學せしものなりと報じ越しぬ、此の日本よりさ云ふは蓋し岡見けい夫人の事なるべし。

○陸奥夫人　ワシントン日本公使の夫人マダム、ムッは明敏にして非常に怜悧なる婦人なり僅かに一年以内に英語に熟されたると驚ろくべく且つ交際に巧みにして米國婦人が云所ろ純然たるソサイエテー、レデーなり、然し毎朝二時間づゝ日本の一小說を反譯し居らるゝ由、聞く所ろによれば撰擇其の宜しきを得此の小說は日本の小說中最良なるものゝ一つの由なり(三月廿一日英國出版ザ、レデー)

○女子被撰擧權に係る上告　英國女皇裁判所の法官が曩に女子には倫敦府會議員となるの資格なき旨を判決せしより府會は之を不當として高等裁判所へ上告に及びたり。

○婚姻及び離婚法を一定せんとす　北米合衆國は州に依りて法律を異にすることとあるが故に時として互に衝突するを免れず就中結婚及び離婚法は諸州に於て其趣きを異にし不便少なからざれば上流社會の人々は大に之を憂慮せり今其不都合なる一例を示さんにニューヨーク州の法律にては一男子が離婚すれば再び結婚するを許されず若し此男子が同州にて結婚するが如きことあらば法律上一夫二婦を有する者さ認定するの定めなれども同人がニューゼルシー州に赴きて結婚すれば同州の法律にて正當の結婚と認めらるゝ如き次第にて其他にも種々の不都合少なからざるを以て米國の代言人及び判官は結婚及び離婚法を全國一樣となさんことを主張せりさ云ふ (五月五日時事新報)

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

●生徒募集廣告

本館に於ては臨時豫備科を設け次學年に入るべき生徒の準備をなす望のものは至急申込あれ但束脩を要せず本館の學科は和漢學英語佛語獨語伊太利語音樂書學料理法裁縫編物等にして敎頭マーサ、ヲルドリッチ孃及內外國敎師數名共授業を擔任す

第五月

麹町區上六番町十七番地 **開成女學館**

速記彙報

毎月一回發行!! 五月十一日發行●

第六册

價 郵稅共一部金六錢 六部前金三十四錢

概目

●グラッドストン氏ノ速記術ニ關スル演說 筆記譯文

●日本往時ノ速記術 萩野由之

●帝國議會書記官ノ資格ヲ論ス 日東居士稿

●源綱紀氏より關直彦氏に贈りし書翰

●一箇月間卒業速記之秘術の評

●新演說を讀む 柳堂仙史

●元老院の吏員速記術研修會を設く

●速記術を學ぶ者の讀むべき雜誌

●東京の速記術の雜誌

●府下の演說會

●日本の國訛り

●速記道中膝栗毛

●講義(第五回)林茂淳講述

●外數件●

◉附言●

●第六册の字數前册に幾んど倍す

●(廣告料)一行五號活字二十三字詰前金五錢

〔發行〕東京神田區裏神保町一番地 **速記彙報發行所**

〔大賣捌〕東京神田區裏神保町 敬業社

本多錦吉郎先生著
文部省撿定濟
小學書手本附錄

臨寫法

全一册
定價八錢
郵稅四錢

此書は圖書の法則と書學授業の方法とを丁寧明瞭に說示したるもの也就中其授業法の如きは先生多年の苦心を積み一々之を實際に徵したるものなれば世の空理想像を以て其術を講したる物とは自ら徑庭の違あり故に一たび之を繙けば遐邑僻陬良師に乏き者は師無くして其道を知るを得可く敎師學生學ふに鞅掌なるの士は少しく勞して其効を收むること多きは疑ふ可らず希くは世の書學に志すの士試に一本を購て弊店曩に已に發行の書手本と對照して其虛實を知り給はんことを乞ふ

發行所 東京神田雉子町三十二番地 **團々社書店**

貴女の友

第五十四號 明治二十二年四月廿五日發兌

改良減價

目次

論說○美術側面の觀察(つゞき)○私立高等女學校の現況(續)○女敎員養成法
學藝○日用(つゞき)○博物學について(圖入)○英語の事(續)○諸國方言一斑
叢談○惡少年(つゞき繪入)○佳人の大勇○憎むべし鄙むべし

懸賞考物

寄書○文かく女子、評する博士
新報○數件
廣告○數件

一部五錢

發行所 日本橋區本町二丁目三番地 **東京教育社**

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

東京貴女學校學監正六位下田歌子女史題辭
大坂女子手藝會 桐井愛子女史著

女子手藝 押繪教授書 完

美本金表
紙極上製

上巻 正價金五拾錢 郵稅貳拾錢
中巻 正價金四拾五錢 郵稅拾八錢
下巻 正價金四拾錢 郵稅拾八錢

（御送金は郵便小爲替（大阪局拂渡）或は通運早速便●切手代用一割增の事）

全部一回に御送金注文の御方には來る六月三十日迄特別大減價**金壹圓貳拾錢**にて差上全部御注文に限り運賃一切弊社より支辨可仕候

東洋の日本は美術國なり東洋の日本人は美術心に富めり東洋の日本人は美術士なりとは之れ西洋各國人の公評する處なり今や我國の美術は歐米各國人の嗜好に適し日本美術の名聲海外に博せり此に於て乎日本政府に於ても特に美術品を取調べ大に其實物を集めらるゝの際我國美術品とも稱せられ古來より世に傳わりたる女子手藝押繪の如きは中世殆ど廢滅に飯し絶て顧みるものなかりしに先年**畏れ多くも　皇后陛下**京都へ御幸啓あらせられたる砌大ひに御賞勵あらせられたるやに仄に承れり茲に今般弊社に上梓せし愛子女史の著作せられたる押繪教授書は吾國古今の押繪雛形を網羅し且つ懇切なる方法を示されたる良書なれば苟も日本婦人たるものは貴顯淑女令孃を問はず何人と雖ども女子の手藝に志す君たちは乞ふ一本を購求して坐邊に供へられんことを伏て希望す

發兌元 大阪東區南新町壹丁目 鳳文社

●東京女學校●●神田區猿樂町十三番地●●生徒募集

本科（和、漢、英學）別科、夜學科（英學）手藝科（裁縫、編物）各級へ入學を許す

發兌

五月。四日 十一日 十八日 廿五日
六月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
七月。六日 十三日 二十日 廿七日
八月。三日 十日 十七日 廿四日 卅一日

定價

一册。六錢 郵稅。一錢（但府內無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部を寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町毆々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄕區元富士町盛春堂○同本鄕區春木町二丁目解明堂○同本鄕四丁目文春堂○橫濱住吉町角田學貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入濕集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年五月九日印刷
明治二十二年五月十一日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHÔ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.